

Title	旧刊『聯珠詩格』版本考
Sub Title	Comparative study of early printed edition of Lian zhu shi ge
Author	住吉, 朋彦(Sumiyoshi, Tomohiko)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2008
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.43 (2008.) ,p.215- 263
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	挿図
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20080000-0215

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

旧刊『聯珠詩格』版本考

住吉朋彦

明治三十六年（一九〇三）九月二十八日、徳富蘇峰は自ら蔵する『聯珠詩格』の（「江戸初」）刊本に識語を附し、次のように述べている。^①

此書幼時嘗讀焉。今因得購這冊子、重寓目矣。玉石混合、雖極蕪雜、亦有於他集之中不可得見之佳作也。

明治三十六九月念八夕、蘇峯學人

蘇峰の言はごく短いが、元初通俗の編著である本書について、近代読書子の平均的な見方を記したものと見える。また蘇峰は、ただ本書に収める詩作の品評のみでなく、編集の在り方にも及んでおり、他集との相補の見地から評価を下している点は、読書家としての面目を示している。そして実際、唐宋の文学界、

殊に広く詩人の簇生した南宋代の様相につき、本書によってその一斑を窺い得ることが、中国文学の研究者に再評価され、例えば吉川幸次郎氏の『元明詩概説』（一九六三、岩波書店）には、本書を一の資料として、宋末元初の市民参加の文学活動や、宋末の詩人が元初に置かれた情況について述べられている。^②また近年では、『全宋詩』の編集を経た中国の研究者の間で、本書が中国には殆ど伝を絶っていた事情から、『全宋詩』を基準とした場合の「佚詩」を多く含む点が、本書への関心を惹起し、遂に下東波氏の労作『唐宋聯珠詩格校証』（二〇〇七、鳳凰出版社）が上梓され、懇切な解題や注釈とともに、その本文が広く知られるようになったことは、真に意義が大きい。^③

一方、幕末の文久三年（一八六三）に生まれた蘇峰の語に、「此書幼時嘗讀焉」とあったことは、明治以前の日本に於ける『聯珠詩格』の流布についても想起させる。日本では早くから本書が行われ、南北朝期以降に受容されたが、何と言っても江戸時代の後葉にその最盛期があり、後に見るように、その契機は近世初の朝鮮本の伝来にあった。近世の状況を、基盤となるべき版本の概要に即して見ると、まず江戸初期、寛永年間（一六二四―一四四）前後刊行の覆朝鮮版及び、その附訓翻刻版の二種が広く行われた。また一段落の後、江戸後期、文化元年（一八〇四）刊行の大窪詩仏校本と、その後を追った天保二年（一八三一）刊行の貫名海屋校本の二種が現れて、本書の流布本となった。そしてこれら代表的版種の後印本や、追隨した群小の版本が、幕末明治期まで本書の受容を支えたものと推量される。一旦は下火となった本書への受容が改めて高まったのは、文壇に於いて、大窪詩仏の属する江湖詩社を始め、宋詩の清新を推奨する性霊派の優勢となったことが、一つの理由と考えられる。これらの基盤の上に、近世の文化、殊に詩や文学全般に及ぼされた影響が著しいことは、日本文学の研究者、注釈者によって屢々指摘されてきた。

また本書受容の一環として産み出された、『聯珠詩格』に基づく派生的図書として、室町期に仮名注釈書の『聯珠詩格抄』があり、柳田征司氏によって、基礎的な考証が加えられている（『室町時代語抄物の研究』へ一九九八、武蔵野書院）第九章第五節「洞門抄物『聯珠詩格抄』について」。次いで江戸後期に、倉敷の僧教存の続作である『続聯珠詩格』や、阿部樸齋の注解『聯珠詩格名物図考』があり、大窪詩仏と同じく江湖詩社出身の柏木如亭には、本書に達意の和訳を附した『訳注聯珠詩格』があつて、近代東国語資料としても重視されてきた経緯がある。同書にはごく最近、揖斐高氏によって校注が施され、問題を附した文庫版（二〇〇八、岩波書店）が刊行されて、一層広い読者を得ることとなった。

総じて近年は、通俗の詩学書と見られていた本集が、学術研究の上から見直される傾向にあるけれども、惜しいことに、本書の版本に関する研究は殆ど進められていない。その理由は幾つか考えられるが、一つには、文化元年刊本における大窪詩仏の校訂が、佐藤一斎の蔵する「元刻本」以下、八種の本文を校合した優秀なもので、文化刊本自体が数多く印行された他、長澤規矩也氏によって同本の影印も出版されているから（和刻

本漢詩集成 総集編」第九輯、一九七九、汲古書院）、本文の検閲にあまり支障がなく、一般に版本の如何が問題とされないからであろう。明治初年まで印出され、文化元年刊本にも増してよく行われた天保二年刊本も、文化刊本にない増注を擁する上、また独自の校訂を施し、本文の理解を助けている。なお先述の卜氏『校証』は、この天保二年刊本を主に、文化元年刊本と対校し、さらに朝鮮本二種をも参考されたものである。この措置は、優れた流布本を以て主とするという校勘学上の見識に拠られたものであろうし、また結局の所、校訂の実効性に関しても大きな問題はないのであるが、校本同士を校合するという方法は、少なくとも校本の来源をこそ明らかにすべき版本研究の立場とは異なっている。そこで本稿では、本書の旧刊諸本に対象を定め、流布本の形成に至る道のものについて、一定の見出しを得ることを目指し、実際の伝本を整理して、版種間の相互関係を考えてみたい。

なお本書の版本研究は、日本の近世に行われた数多くの版本を対象に含めなければ、その体を成さないが、これらの伝来はあまりに龐大かつ広範であり、現在のところ研究の途上にあつて、その収束は遠い将来に待たなければならぬ。また版本の

他に存する伝写本に関しては、後に見るように、本書校訂に於いて重要な地位を占めるのであるが、写本検討の常として、各本の隈なき比較を要する上、その作業に先立ち、影響を持ち得る版本の定位が欠かせない。そこで標題のように範囲を限定し、暫時の成稿とせざるを得なかった。

『聯珠詩格』の原編者である于済の事蹟については、本書によつて知り得るのみ、僅かに判明する事柄を集めると、于済、字は徳夫、黙齋と号す。江西鄱陽の人。本書を増編した蔡正孫の元大徳四年（一三〇〇）の自序に

一日番易于黙齋通所選聯珠詩格之卷來、書抵予曰（中略）
黙齋、名濟、字徳夫。志於爲詩。平山曾先生序其所謂拙藁者、拳々然以高古期之、有不天不止之語。則可以知其學之所向矣。正孫於黙齋未見顔色、千里神交、若合符契。今又獲儕姓名於文字間、豈非幸歟。豈非幸歟。

とあり、詩話の出版によつて広く名を知られた蔡正孫に、自ら編んだ詩字書を寄せ、閲読を請うている。またかつて曾子良の許に詩稿を送り、序文を得てもいるらしい。曾子良、字は仲材。平山と号す。江西金谿の人、もと同南豊の族。宋嘉定十七年

(二二二四) に生まれ、咸淳四年(一二六八)の進士、広西興安県尉から浙江淳安県令に遷り、宋滅びて仕えず、隠棲して堂室に「節居」と扁し、道学の講授と詩作を事とした。『周易輯説』『咸淳類彙』等の著作があったと言いが、伝わらない。于済と同じ江西の出身で、宋の遺民として令名が高かった^①。

于済の著作を増編し、現在の形としたのは、一書の検閲を請われた蔡正孫である。蔡正孫、字は粹然、蒙齋、また野逸叟と号す。福建建安の人。著作に『精選古今名賢叢話詩林広記』『精刊補注東坡和陶詩話』を存す^②。その履歴もまた明らかでないが、本書中、自詠に附して若干の言及があり、それをまとめると以下のことが知られる。まず卷十五「客程尋詩」自注に

僕己未年二十有一、侍先君入杭京監試。一路抄詩、午炊於仙霞嶺、邸壁題此絕。轉盼四十二年矣。舉筆惘然。

とあるから、蔡氏は宋嘉熙三年(一二三九)の生まれ、開慶元年(一二五九)己未、二十一歳で父に侍して入京した。その後、監生として杭州に滞在(卷十「西湖晚景」、卷十二「還自京庠」、同「星夕會友」、卒業を遂げる前に元軍の入城、杭州の陥落があり、徳祐二年(一二七六)丙子、兵後に帰郷した(卷二「凭闌」)。郷里では風流韻事に耽り、詩話の集録と刊行に勤めたよ

うであるが、この間の事情は『詩林広記』の自序に「正孫自變亂薰灼之後、棄去舉子習、因得以肆意於諸家之詩」と述べられている。蔡氏は『宋元学案』卷八十四によると、宋の遺民として生涯を貫いた晁山先生謝枋徳の門人とあり、謝氏の作や詩話は本書に類出する。さらに同門の魏梅墅(名天応、『詩人玉屑』の編者魏菊莊、名慶之の息)、王道可(名淵濟、本書に序を寄せる)との詩の応酬等、蔡氏交友の様子も散見され、本書には蔡氏別集の如き内容を呈する所もある。こうして建安に於ける元初の四半世紀を過ごし、大徳四年(一二三〇)、六十二歳の年に至り、本書増編の機に際会したのである。

さて、于済が蔡正孫に送った編著は、蔡序には「聯珠詩格」とあるが、同じく本書に冠する王淵濟の序には「詩格三卷」と、また于氏の自序に編集の動機を述べ

蓋嘗病時人采詩混雜無統、觀者不識其有格。暇日拈出絕句、中字眼合格者、類聚羣分之。綱舉目張、有條不紊。書成、以所集三卷質之蒙齋翁。翁是之、乃復益其所未備者而備焉。且命其子彌高傳諸梓、錫之以連珠之嘉名。

とあるから、于氏編集の当初は、ただ「詩格」と題する三巻の書であつたと思われ、要語を以て類選した絶句の総集であつた

ことがわかる。蔡正孫は、これを新奇としながら、「然猶惜其雜而未倫、畧而未詳也」と観じ

於是逆其志而博采焉、故凡詩家之一字一意、可以入格者、靡不具載。擇其尤者、凡三百類千有餘篇、附以評釋、增爲二十卷。壽諸梓、與鯉庭學詩者共之。

と（蔡序）、全面的な増編を施し、新たに批注を加え、二十卷の規模に再編成したのである。蔡氏はこれに「聯珠詩格」の題目を附し、子の彌高に命じて刊行した。先に引いた「客程尋詩」自注に「己未」（一二五九）以来「轉盼四十二年」とあったから、大徳四年（一一三〇）、本文成るとすぐに序が書かれ、梓に附されたことになる。ただこの大徳年間の初刻本は伝存せず、後出の諸本によって窺う他に、詳細を知る術がない。

本書の旧刊諸本について述べるに先立ち、元刊本について附言したい。現在『聯珠詩格』の初刻本や、元刊本を始め中国で刊行された版本は全く存せず、本書原貌の理解を妨げているが、かつて日本に元刊本の伝来していた一、二の証跡がある。その一は、日本の文化元年に刊行された本書の大窪詩仏（天民）校訂本に、山本北山が序を附して

天民乃哀愛日樓所藏元刻本、緑陰茶寮朝鮮本、平安翻刻元版本、朝鮮版翻刻本、活字本、正徳本、巾箱本、別版巾箱本及唐宋詩人本集、總集、選集、別集數百部、彼此較讐。

と校訂の様子を述べる中で、愛日樓佐藤一斎收藏の元刻本に触れていることで、一斎自身も序を寄せ「余藏元槧一部、有評釋無増註、蓋當時原本」と記している。しかし残念ながら該本の行方は知れず、また文化刊本の本文は、校合により却って原貌を失っている恐れがあり、確かな所では欄上の校注にその片鱗を窺わせるのみ、一斎旧藏本の出現が強く望まれる。

それとは別に、本邦旧鈔本を閲すると、その多くは後出の〔南北朝〕刊本の伝写と見られるが、同本は刊語等の明徴を持たないため、或いはその原拠となった本文に基づく伝写本が含まれる可能性がある。そしてさらに、慶應義塾図書館に蔵する文安元年（一四四四）書写の一本は、卷一至四を存するのみの残本ながら、その劈頭に、他本には見出されない所の、次の序を冠している。今参考のために全文を翻印する。

詩莫難於唐律、而尤難於絶句。以其語簡、而字面句法之難工也。良冶鑄器必有模、騷人險詩必有格。也者、其字面句法之有定式歟。前賢之一篇一句、皆有格法。但無人拈出、

讀者皆草、不知之、爲可格可法也。番易于默齋所編連珠詩

格、非惟拈出之句法、且旁搜博採、一格有數篇。同一機軸

者、羣分類聚、列爲二十卷。其用巧可謂勞矣。其教人可謂

忠矣。夫絕句格法、可謂大備而無遺矣。得於驪龍頷下者、

纍、相貫。名曰聯珠詩格、不亦宜乎。學詩者得此、便可按

圖索驥、依之樣葫蘆、復熟之後、走盤圓活、機轉無窮。豈

惟絕句合格。推之於長編、唐律觸類而長、皆自此格中充廣

之耳。所謂難者奚夫難。板而行之、以廣其傳、賞音者必衆

矣。皇慶癸丑小春朔、建江應元體仁叟、書于秋岳吟隱。

皇慶癸丑は二年（一一三三）。江応元の閏歴は不明、本序によつ

てその貫籍と号を知り得るのみである。この序は明らかに「聯

珠詩格」の刊行に際して書かれたと推されるが、その年次は、

大徳四年（一一三〇）頃の初刻から十餘年を隔て、重刻に臨ん

で附されたものと解されよう。これも初版後印時の粉飾と見ら

れないことはないが、その本文用字を検すると、伝写による過

誤を見込んでもお、他本とは異なる点があつて、やはりまた

一版の流通を徴証するものと認められる。そこで本稿では、旧

版の伝存が不十分な点を補うために、できるだけ当該の文安元

年写本を加えて校合を加え、その關係を考えるための一助とし

たい。該本伝存の概況は以下の通りである（図版一）。

〈慶應義塾図書館 一一〇X・三三〇・一〉 一冊

精選唐宋千家聯珠詩格（二十七卷） 存卷一至四

元于濟編 蔡正孫（増）編（並批注）

文安元（嘉吉四）年（一四四四）写 伝写元刊本

洪引表紙（二・二・六×一五・二種） 左肩打付に本文別筆にて

「聯珠詩格〈首卷〉」と、右肩に「盈」と墨書す。右肩小簽剥落

痕、墨書下に旧筆不明朱書。押し八双あり。改糸、袋綴。本文

斐楮交漉紙。見返し後補。首に「精選唐宋千家聯珠詩格卷之一」

と題し、行を接して前引の江序（一張）。紙葉を改め「精選唐

宋千家聯珠詩格卷之一」（格低三）（番易默齋于齋（七）） 徳夫／建安

蒙齋蔡（正孫） 粹然 編集／ 四句全對格／（格低三） 漫興

（隔七） 杜工部、次行より本文。行間批注（小）。每聯改行。

卷之一（八張） 四句全對格 一起聯物喩物對格

卷之二（九張） 後聯對句格 一後二句疊字相貴格

卷之三（一〇張） 第一句疊字格 第四句貫頭兩句格

卷之四（一二張） 用只今字格 一用如何字又格

字面高約一八・四種、有界、每半葉九行、行十六字格。一筆。

毎葉半折部中段に「詩格幾」と題し張数を存す。尾題「精選唐宋千家聯珠詩格卷之一」「精刊唐宋千家連珠詩格卷之一(三)」「精編唐宋千家聯珠詩選卷之四」。

〔精編唐宋千家聯珠詩選卷之四〕

本文同手の墨筆にて返点、連合符、送仮名、朱筆にて平声点書入、別手墨筆にて音訓送仮名、行間補注書入あり。每巻尾題後接行、低二格にて(卷一)「峇嘉吉四年(甲/子) 沽洗廿七日巳刻書之了」、(卷二)「峇文安元年(甲/子) 首夏初八日書之了」、(卷三)「峇文安元年(甲/子) 夏十日未刻寫之了」、(卷四)「峇文安元年(甲/子) 孟夏十三日辰刻書之了」墨識を存す。末尾後見返しに後筆にて「自文安甲子年至文化甲子年(格) 通計三百六十一年」墨識あり。嘉吉四年は二月五日に文安と改元した。

本稿では現存する『聯珠詩格』の旧刊諸本を対象とし、その版本を検討する。取り上げる版種を先に掲げると

〔南北朝〕刊本

朝鮮刊(甲寅字) 单注本

朝鮮刊 覆朝鮮甲寅字单注本

朝鮮刊(甲寅字) 増注本

朝鮮明弘治十五年(一五〇二) 跋刊 覆朝鮮甲寅字増注本
〔江戸初〕刊 覆朝鮮甲寅字増注本

朝鮮刊(甲辰字) 本

概そ十四から十七世紀の間に行われた和版二種、韓版五種の計七種を取り上げ、版種間の關係を明らかにし、日本に於ける本書流布本の形成についても言及したい。

精選唐宋千家聯珠詩格二十巻

元于濟編 蔡正孫(増)編(並批注)

〔南北朝〕刊

先ず蔡正孫序(第一至六張)、首より本文(上略) 一/日番禺于默齋通所/選聯珠詩格之巻來/書抵予曰此爲童習/者設也(中略) 噫吾老矣且願學/焉豈特桐子云乎哉/閱之終編諷詠數四/得以見其用功之勞/而用心之仁也然猶/惜其雜而未倫略而未詳也於是逆其志/而博采焉故凡詩家/之一字一意可以入/格者靡不具載擇其/尤者凡三百類千有/餘篇附以評釋増爲/二十卷壽諸梓與鯉/庭學詩者共之(中略) 歲/庚子春三月蒙齋野/逸叟蔡(正孫)粹然書于/方寸地(書) 一次行鼎形陽刻「蒙

(封)／齋、双辺方形陽／「地(書)」印記摹刻。無界、四行八字(図版二)。

庚子は元大徳四年(一二三〇)。方寸地は蔡氏の書齋を指し、本文中にも屢々言及される。

次で王淵濟序(第七至十張)、首より本文「(上略)一／日留方寸地適有携江／左 嘿齋于君之緘成／以詩格三卷與偕披而／視之立意甚新但惜其／擇未精採未廣耳 翁／慨然欲成其美於是旁／披博採增為二十卷(中略) 命其子／彌高鳩工而壽諸梓欲／以公天下之斯文也刻／成翁不自以為功乃大／書 于君姓名冠之篇／端而自附於其後(中略) 大徳己亥花朝玉淵王(淵濟)道／可敬書于龍湖書堂(書行)。無界、五行九字。

大徳己亥は三年。王淵濟、字は道可。「宋元学案」に拠ると、蔡正孫と同じく謝枋得の門人であり、本書中にその詩数篇を収め、最末篇等に附してその言を録している。なお本序中「道可」の文字を、後出の朝鮮諸本では「道了」に作っているが、これは行書体の翻印の誤りと思われる、該本序文の写刻の様が、幾分か元刊本の原貌を止めていることを窺わせる。

次で于済序(第十一至十三張)、首より本文「(上略)暇／日拈出絶句中字眼／合格者類聚而羣分／之綱举目張有条不紊／篆書成

以所集三卷／質之蒙齋翁 翁是之乃復益其所未備者而備焉且命其子／彌高傳諸梓錫之以／連珠之嘉名(中略) 徳西／孟商番易默齋于済／徳夫序(行楷)、隔一行低一格に鼎形陽刻「嘿／齋」、双辺方形陽刻「番易／于氏(書)」印記摹刻。無界、五行八字。

次で総目(二四張)、首題「精刊唐宋千家聯珠詩格總目(格低三) (番易默齋于済 徳夫／建安蒙齋蔡正孫粹然) 編集(字大)、次行花口魚尾圈発下に二格を低し卷数、次行より二、九格を低し編目を標す。卷之二十「用後身字」に至る。每半張七行、行十六字格。尾題「精選唐宋千家聯珠詩格總目(字大)」。

卷首題「精選唐宋千家聯珠詩格卷之一(至二十)／(格低三) (番易默齋于済 徳夫／建安蒙齋蔡正孫粹然) 編集(字大)／四句全對格(墨刻)／〇漫興(格四) 杜工部」、次で細行に批注(字小)、行を接し本文起承句、次で又細行に批注(同)、行を接し本文転結句。卷之四「用只今字格」以下、編目に標出の文字は陰刻或は墨開陰刻。傍点、傍圈附刻。每聯改行、每編に四篇(每卷首尾編のみ三篇)を存し改張(図版三)。卷四至十六、十八、二十首題「精刊唐宋千家聯珠詩格」。

卷之一(一〇張) 四句全對格 一起聯物喩物對格

- 卷之二（一二張） 後聯對句格 — 後二句疊字相貫格
 卷之三（一三張） 第一句疊字格 — 第四句貫頭兩句格
 卷之四（二七張） 用只今字格 — 用如何字又格
 卷之五（二七張） 用今日字格 — 用近來字又格
 卷之六（二七張） 用須臾字格 — 用逢人字格
 卷之七（二八張） 用自字格 — 用無情字格
 卷之八（二七張） 用無消息字格 — 用不作字格
 卷之九（一五張） 用引得字格 — 用不信字格
 卷之十（一九張） 用聞說字格 — 用儉字格
 卷之十一（一八張） 用從今字格 — 用何処字又格
 卷之十二（二一張） 用可是字格 — 用不然字格
 卷之十三（二七張） 用只合字格 — 用不見字格
 卷之十四（二七張） 用見字格 — 用人不到字格
 卷之十五（一五張） 用直字格 — 用看字格
 卷之十六（二七張） 用吟字格 — 用誤字格
 卷之十七（二三張） 用留得字格 — 用不用字又格
 卷之十八（一四張） 用分付字格 — 用辜負字格
 卷之十九（二〇張） 用兩自字格 — 用枉字格
 卷之二十（一四張） 用至今字格 — 用後身字格

左右双辺（一七・一×二・〇）^〇 有界、毎張前半七行細四行、後半六行細四行、行十五字格。楷行写刻体。版心中黒口、双線黒魚尾（^向対）問題「幾卷（寺朱幾フ）、張數。卷十三第十七張（尾）中縫部「自八至此卷憲海書」記あり。原板一面三張。卷尾題「精選（刊）唐宋千家連（聯）珠詩格卷之幾」「精編唐宋千家聯珠詩選卷之四」「精選唐宋千家詩海聯珠卷之十六」「精刊古今名賢連珠詩選卷之十八」「唐宋千家聯珠詩格卷之十九」等。本版は、その原序を見ると、元大徳四年（一三〇〇）頃、蔡正孫の嗣弥高が刊刻した版本に基づく翻版と思われるが、元刊本を見出し得ない今日からは、その關係の如何を知ることができない。ただ本版の様式を見ると、行款の定まった一般の版本に比べ、張子の前後で行数を変える等、例を異にしているが、これは、毎編中の詩篇の数を等しくするという堅固な編集方針に従い、版式を本文に適合させた結果と思われる。即ち本書では、「四句全對格」等の黒牌による標目の下、特定の字句を用いた七言絶句数篇を録するが、その数は原則として四首、毎卷首尾の編のみは三首を収めるが、これは題目の分を減じたまで、この一編四首を一張に配する形を以て貫かれている。また本書の編目を通覧すると、「用莫字格」の次に「用莫字又格」等と、

屢々「又格」と称し同趣の編集を再続しているが、これは、ある編目の下に録すべき詩篇の数が多い場合、一編四首の原則を崩さず、その形式を保ちながら篇数を増し、事実上その編を延伸した形であつて、毎編の末尾には多く蔡正孫の自作を配し、一編の篇数を満たしていることを見ても、増編時の処置を反映した構成と考えられる。このことは逆に、本書の編集が、特殊かつ一定の版式に合わせる意図の下に行われたことを示している。その本文が版本の様式に規定されるという性質は、蔡氏批注にも顕れており、本書では通例、収録の字句に寸評を加え、作詩上の意図を解説する工夫を施し、これらは、前後二行に配された詩篇行間の細行に置かれているが、細行に詩作の契機や字句の典拠を詳述する際には、十分な餘地を得られないため、批評の文字を加えることを止めている。これを要するに、本版は、編刊一体となつた原刻の様式を伝えているものと推量される。この点は、以下のように本文の上からも追証される。

該版の本文を、先述の、文安元年の書写に係る元刊本伝写本（以下「文本」と称す）に比較すると、該本の巻一第一張後半第八行（以下「一一後八」等と表記、行数は細行も本行と同等に数える）の蘇東坡「溪陰堂」詩の承句（便宜上、作者名は

表記に従い、各句の位置は起承転結を以て示す）「綠槐高處一蟬鳴」を、文本に「二蟬吟」に作るが、これは蘇軾の本集や踏韻（侵韻）を見ても文本が正しく、二二後九・（蔡）蒙齋「梅花」結句注「司馬公贊云、深衣大布」は、文本に見える「深布大帶」の形を誤り、二一六後十・葉苔磯「西湖值雨」結句「變作元暉水墨圖」は、文本の「水墨圖」を誤り、二一八後二・李宗易「靜居」前聯批「為一身之主」は、「心為一身之主」の首字を欠き、三一二前十・寶鞏「別墅寄兄」後聯批「可見得而山之樂」は「西山之樂」を誤り、三一四前二・韓偓詩題目「元溪道中」は「尤溪」を誤り、四一二前六・杜牧之「悵別」転句「如今風擺花狼籍」は「花狼藉」を誤る等、誤つて刻した文字がかなり多い。この中には該本翻刻時の過誤も含まれるであろう。しかし一五後十・林鴻「泊湧金門」転句「此景此詩描不盡」は恐らく「此景此時」の誤り、三一五前八・（黃）山谷「示姪」注「山谷姪相、字惟深、小字韓十。知命第二子。時相隨知命舟行」の「相」は、両者とも「相」が正しく、三十五後一「臚別」篇の題下に作者鄭谷の名を欠き、三十二前三・賈公餗「諷蔡文忠」篇注「日飲醇酎」は「醇酎」の、四一二前三・杜牧之「悵別」篇注「愛而約之以卜年」は「十年」の、四一

七後九・趙小山「饒別」後聯批「惜別可寧」は「丁寧」の誤りと見られるが、これらの箇所はみな、文本も同様に誤っており、該本は文本と同系である一方、底本からの翻刻に際し相応に字句を誤った本文と見ることができると。さらに一―前二の編者名「于濟」を、文本に「于齋」に作り、二―七前三・邵康節「謝寄枕」篇批「非超然／樂道者無此趣」の「樂道者無此趣」六字を、文本に重出し、三―三後十・（楊誠齋）「松聲」結局「萬頃銀濤殷五湖」を「銀灣」に、三―五前十・（黃山谷）「示姪」注「真得訓誨子姪之体」を「子姝」に、四―二後一「少年行」作者を「令孤楚」に、四―十一後四・趙釣月「驛程記」後聯批「宋駐蹕水塘、不作中原夢想」を「分塘」に、四―十四後九・韓偓「翠禽」後聯注「所謂遙矰擊而去之」を「増擊而去之」に、四―十七前五・林古村「烏衣國」結局批「正含晋室偏安江左之恨」を「倫安」に作る等の例は、みな文本の誤りで、該本に拠って文本を正し得る箇所もある。この中の「驛程記」篇の例は、朝鮮諸本は正字を用い「錢塘」に作るが、これは、日本では用いられない元代の俗字「水」を、伝写本には誤り、翻刻本には原貌を存する形で、両者の関係をよく示している。無論この中には、文安元年の伝写時の誤りも含まれていよう。また

本文で採用する字体の傾向について見ると、両者共に略字の使用が多く、細行批中の「眞」「盡」「處」「聲」「畫」「無」「雖」「興」等の字を「真」「尽」「処」「声」「画」「无」「虽」「真」に作る等、両者は字体の異同に於いて近似するが、本行「節」「劉」「柳」「船」を「節」「刘」「柳」「舡」に作る傾向が強い点には、該本に独自の特色である。総じて、本文異同の正誤が相反する関係や、字体のレヴェルでの一定の不一致をも加味すると、両者は直接の継承関係とは見なされず、大徳四年頃初刻本から、各別に派生したと考えられる。これに加え、朝鮮諸本との比較によつて、元版との関係がある程度措定されるから、具体的な例証を踏まえ、朝鮮版解題の所で重ねて述べることとしたい。なお本版の刊刻について、書工僧と思わしき「恵海」の名を徴することができたものの、その時期や場所、遂行者を限定することはできなかった。版本の様式から見て、従来の南北朝刊行とする説に従いたい。

以下、本版諸伝本の解題を掲げる。

〈国立公文書館旧内閣文庫 別五九・二〉

林鷲峰手沢 林家 昌平齋旧藏

五冊

後補黄檗染艶出表紙(二四・五×一六・九糎) 左肩題簽を貼布

し「聯珠詩格〈幾之幾〉」墨書(首冊は剥離、同文打付書)、

題簽下打付に別筆にて冊数を書す。首冊のみ右下方打付に不明

墨書、これに重ね毎冊右下方に双辺墨印藏書票を貼布し「文史

一ノ四」と朱書す。又内閣文庫藏書票貼附。背面不明(明末)

刊本。もと五針眼を改装し四針眼とす。虫損修補、一部裏打。

見返し新補。首に原序、総目を存し本文に入る。毎冊四卷。卷

八第十六、十五張錯綴。

〔室町末近世初〕墨筆にて返点、連合符、送仮名、本文校改書

入、別手(近世初)朱筆にて韻圈、訓仮名、欄上補注、蔡氏批

注に豎句点、作者名下に「唐(口)」或は「宋(木)」注記書入、

〔江戸前期〕朱墨にて欄外校補注(勝覧)「事文類聚」参照、

又別手朱墨欄上校注(二本)「本集」増註(参照)書入を存

す。毎冊首に単辺方形陽刻「自/肯」「釋氏/知允」朱印記、

方形陰刻「松原介枝」朱印記、首に同「弘文學士院」朱印記

(林鶯峰所用)、毎冊首に単辺方形陽刻「林氏/藏書」朱印記

(林家所用)、毎冊前表紙並毎冊尾に同「昌平坂/學問所」墨印

記、毎冊首に双辺方形陽刻「淺草文庫(楷)」、單辺方形陽刻

「書籍/館印」、同「大學/藏書」朱印記を存す。

〈東洋文庫 二・B-d・一六〉

一冊

存卷一至五 大徳寺黄梅院 徳富蘇峰 大野酒竹旧藏

後補淡墨澆目艶出表紙(二二・七×一五・三糎) 左肩題簽を貼

布し単辺及び「詩格評點〈幾之幾〉」の題目を書す。その右傍

に別筆にて又「詩格評點〈幾之幾〉」と書す。改系。本文辺外

の料紙を刪去し、表紙大の別紙にて裏打修補。原序(首葉鈔補)、

総目を存し本文に入る。卷五第十六・十七張欠。卷首匡郭一七・

〇×一一・九糎(但し添墨により原寸不詳)。

〔室町〕期の朱筆にて豎句返点、連合符、音訓送仮名、蘇東坡

のみ集付を加え、同手にて卷一末尾辺外に「甲午正月二十六日」、

卷二同「甲午二月三日加点了」、卷四尾題下に「仲秋三日/加

点了」識語。又〔江戸〕期墨筆にて行間校注書入。卷四首下辺

下補紙に「(書)般若波羅蜜經」と、卷四尾に「紫野大徳寺塔

頭黄梅院持/(格)禁他用者也」と書す。蔡序末に不明花押。

毎冊後表紙中央に前表紙別筆にて「西京/紫野/(又格)黄

梅院/(同)「藏書之内」と(末行擦消、後筆にて重書)、後

見返しに後表紙前筆同手にて「西京 黄梅院」と、前後見返し

に同後筆同手にて「紫野/黄梅藏/禁他家堅之者也」

等と書し、後見返し下方に又別手にて「無住軒(九如)藏書

〔花〕 識語、又数筆にて「客寮常住」「知客寮常住」と書し、

方形陰刻「宗氏」墨印記を存す。首冊前見返し右辺に徳富蘇峰

筆にて「酒竹大野兄清玩／明治三十六極月二十日蘇峰生拜贈」

と書す。総目首並に巻首に方形陰刻「島田翰／讀書記」朱印記、

首に単辺右形陽刻「蘇峰／志讀」、円形陰刻「I.T.」朱印記、

単辺方形陽刻「酒竹文庫（楷）」朱印記を存す。

該本加點識語中の「甲午」については、文明六年（一四七四）

または天文三年（一五三四）とする推定が示されている。^①

〈宮内庁書陵部 五五六・一五一〉

存卷一至四 九至十 十七至二十

五冊

新補茶色艶出表紙（二五・七×一五・〇糎）左肩題簽を貼布し

〔舊刊〕聯珠詩格」と書す。首冊のみ題下に朱印記、破損。改

糸。裏打修補、原紙高約二四・三糎、天地截断。原序、総目を

存し本文。每冊二卷。卷首匡郭一六・八×一一・八糎。

〔室町末近世初〕朱合堅句点、同墨返点、連合符、音訓送仮名、

行間補注（巻首等、一部胡粉にて抹消）書入、極稀に〔江戸初

朱墨にて欄上補注書入。黄色不審紙。原序末に双辺方形中鼎形

陽刻、方形陰刻不明朱印記を存す。

〈お茶の水図書館成實堂文庫〉

五冊

新井政毅 島田篁邨旧蔵

後補縹色艶出表紙（二三・九×一六・五糎）左肩打付に「聯珠

詩格（幾之幾）」と書す。五針眼、改糸。首冊前見返し「第二

句疊字格山中盧玉」墨書。前後副葉。原序、総目を存し本文。

每冊四卷。卷首匡郭一七・〇×一一・九糎。卷十一第十・十一

張、卷十二第十六・十七張、卷十三第三至五張以下の張子は磨

減が著しい。卷二十第十一・十二張欠。

〔室町〕朱堅句点、稀に返点、連合符、音訓送仮名（第二冊以

下稀）書入、〔室町末近世初〕墨返点、連合符、音訓送仮名、

欄上補注書入、〔江戸初〕欄上作者名標注、補注書入あり。卷

十尾題前に「明治己亥盛夏獲之於新井政毅／（低十） 島田澄」

墨識、明治己亥は三十二年（一八九九）。卷七首題下に「島田

翰／琢 蔵」墨識、卷十八尾題前に「是書太夫人節衣所獲卷

首有捺先大夫図章／者記不忘其原也癸卯二月島田翰識」墨識

あり、癸卯は明治三十六年。每冊首、不明朱印記に重鈴し単辺

方形陽刻「儒索／家風」朱印記、また同「篁邨島／田氏家／臧

圖書」朱印記、大尾に同「島田氏／雙桂園／臧書記」墨印記

（以上二顆、島田篁邨所用）、第二、四冊首に同「島田／澄」、

每冊首並に卷首尾に方形陰刻「島田翰／讀書記」朱印記、每冊首に牌中方形陽刻「蘇峰／文庫」、方形陰刻「蘇峰／清賞」、單辺方形陽刻「穂峯／珍藏」、同大「徳富／猪次郎／之章」朱印記を存す。

〈東洋文庫 二一・B-d・一五〉

二冊

存卷十一至十六 稲田福堂 和田雲邨旧藏

新補淡茶色艶出表紙(二三・八×一五・一糎)左肩題簽を貼布し「唐宋聯珠詩格(五山版)〔十一、十二、十三(朱)〕」等と書す。擬康熙綴。虫損修補。每冊三卷。卷十一首匡郭一七・〇×一一・七糎。

〔室町末〕朱豎句点、稀に返点、連合符、音訓送仮名、同墨欄上校(「三体」参照)補注書入、〔近世初〕墨返点、連合符、音訓送仮名書入、淡茶色不審紙を存す。每冊首に單辺方形陽刻「江風山／月莊」「稲田／福堂／圖書」、每冊首尾に同「福堂」朱印記、每冊首に同「雲邨文庫」朱印記あり。

又 後修

本版には、板の磨滅に従い補刻を加えた後修本がある。確認された補刻の箇所は、卷十一第十一張、卷十二第十五―十七張、卷十三第三―五、七・八張、卷十四第四張、卷十五第一―五張、卷十六第十一・十二張、卷十七第十一―十六張、卷第十八第十四張、卷十九第十二・十三、卷二十第十張等である。もと楷行書体であることから、これらの張子では屢々誤刻を加えており、例えば卷十一第十張後半第八行の「樹陰寒」の「樹」字等は、判読し難い形に変わっている。

〈国立公文書館旧内閣文庫 別五九・三〉

五冊

佐伯藩主毛利高標旧藏

後補淡渋引表紙(二五・一×一六・五糎)左肩打付に「聯珠詩格(幾之幾)」と書す。右下方に双辺墨印蔵書票を貼布し「文史一ノ四」と朱書す。又内閣文庫蔵書票貼附。改糸。裏打改装。原紙高約二四・二糎。見返し新補、首冊のみ前副葉(旧見返し)を存し、〔室町末近世初〕筆にて篇目韻字を書す。原序、総目を存し本文。每冊四卷。卷首匡郭一六・九×一一・九糎。〔室町末近世初〕朱豎点、音仮名書入、別墨返点、連合符、音訓送仮名、首冊のみ欄外行間校補注〔異本〕「本集」「天隠」

「事林廣記前集」参照）書入あり。首に単辺方形陽刻「佐伯侯毛利／高標字培松／藏書画之印」朱印記、每冊前表紙並每冊尾に同「昌平坂／學問所」墨印記、每冊首に双辺方形陽刻「淺草文庫（書）」、単辺方形陽刻「書籍／館印」、同「日本／政府／圖書」朱印記を存す。

右の他、川瀬一馬氏『五山版の研究』（一九七〇、A B A J）に山本北山田藏安田文庫本、小汀文庫本、天正八年（一五八〇）婦玄附識の足利学校、三井家旧藏本を録するが、未見である。

同

朝鮮刊（甲寅字） 単注本

該本は後掲の誠庵古書博物館藏残本よつてのみ知られるもので、十全の著録を期し難い。しかし前出の〔南北朝〕刊本と共に、本書の原形を伝える貴重な本文であり、甲寅字別本との印出の先後は必ずしも確實ではないが、便宜に従い前掲した。該本は、朝鮮朝の諸本に多く見られる徐居正の増注を伴わず、編集当初の蔡正孫單注本で、毎行に十八字の款式を特徴とする。

この系統には同じく朝鮮朝の覆刻本一種が認められ、こちらも不完全の伝存ではあるが、相互に参照し、推定される点がある。次にその概要を掲げる。

卷首題「精選唐宋千家聯珠詩格卷之十七（格七）」番易默齋于（濟） 徳夫／建安蒙齋蔡（正孫）粹然（編集） 用留得字格（墨閉陰刻）／寄懷崔雍（隔六）李商隱（格六）等、次行より本文。編目に標出の文字は墨閉陰刻（木活字）。傍点、傍圈附印。句下に蔡氏批注（小字）を差夾む。每篇改行。

卷之十六（存第八至十五張）〔用吟字格〕—用誤字格

卷之十七（二〇張）用留得字格—用不用字又格

卷之十八（二三張）用分付字格—用辜負字格

卷之十九（二八張）用兩自字格—用枉字格

卷之二十（存第一至十二張）用至今字格—

四周双辺（卷十七首二六・三×一六・九種）有界、每半張九行、行十八字。甲寅字。版心線黒口（接内）、双黒魚尾（向対）問題「詩幾」、張数。巻尾題目、同首。

該本の特徴として、前掲の〔南北朝〕刊本と款式の異なる点を挙げて置きたい。本書には増編時から蔡正孫の批注を伴い、恐らくはその当初から、絶句本文の行間右傍に、適宜評語を附

したものであったが、該本では、漢籍附注本一般に広く行われ

てきた夾注の形式を取り、本行間の細行は設けず、句下に小字

双行を以て附注する款式を用いた。その際、前後各聯の全体に

渉る批注について、前本では両句に係る中段に附していたもの

を、該本では承句あるいは結句の後に附す形とし、同様に、詩

篇全体に及ぶ批注について、前本では起句劈頭の右傍に置いた

ものを、該本では全篇の末尾に附し、結句または後聯のみに関

する批注をも存する場合には、圈発を冠してこれを区別した。

このような批注後掲の様式は、朝鮮本系統の諸本に通底する特

徴で、前掲の〔南北朝〕刊本系統の本文とは異なっている。

また後に見る甲寅字増注本との先後関係について、本文その

ものに徴証は得られないのであるが、同本を覆刻した弘治十五

年跋刊本の安琛跋に、成化乙巳二十一年（一四八五）の徐居正

増注成立以前の情況に触れて、「行於世蓋久、流布於東方」と

述べられている。これに拠り、該本及び後掲の覆刻本が、徐注

以前の流布本に当たると考えれば、該本の方が先出と見なし得

るかも知れない。しかし安琛の言は、ただ元版等の唐本流布の

情況を記したとも認め得るから、なお断定を保留したい。

〔誠庵古書博物館 四一・二八一（二二）〕 一冊

存卷十六至二十首尾欠

後補素表紙（三二・六×二一・三糎）左肩打付に「聯珠詩格」

と、右肩打付に同筆にて「古今雜詠」と書す。背面ハングル使

用木活字本（四周双辺十一行二十三字）。首より本文。

篇目上墨標点、稀に欄上補注書入を存す。

同

朝鮮刊 覆朝鮮甲寅字刊單注本

前記甲寅字單注本を補うべき版種として、同本の覆刻本が見

出される。但し残存二本のみ、巻首の題目や本文の体式は、前

本に同じ。毎巻の張数と内容も前本同様であり、伝存二本によつ

て、略々後半の様子を知ることができ。次に前本との重複を

避け、本文と版式の大要を掲げたい（図版四）。

卷之十一（二七張）用現今字格 一用何処字又格

卷之十二（一八張）用可是字格 一用不然字格

卷之十三（一五張）用只合字格 一用不見字格

卷之十四（一五張）用見字格 一用人不到字格

卷之十五(存第一至十三張、尾欠) 用直字格――

卷之十六(一五張) 用吟字格――用誤字格

卷之十七(二〇張) 用留得字格――用不用字又格

卷之十八(二三張) 用分付字格――用辜負字格

卷之十九(一八張) 用兩自字格――用枉字格

卷之二十(存第一至十二張、尾欠) 用至今字格――

单辺(卷十一首二五・〇×一七・〇糶、卷十七首二五・一×一

七・一糶) 有界、每半張九行、行十八字。甲寅字体。版心小黒

口、双黒魚尾(対) 問題「詩幾」、張數¹³。

該版の本文について、惣々の間の著録であるために、字句の異同を包括的に述べることができない。限られた範囲での対校に従えば、全存する他本との間に大きな異同は見られないようであり、字体の採用等の細かな点では、後掲の徐居正増注本系統、即ち朝鮮刊行の諸本に合致する。朝鮮朝に於ける単注本と増注本の、刊行の先後関係は明らかでないが、甲寅字単注本の本文や用字が、諸本の淵源となった可能性もある。いずれにせよ本稿では、暫時の処置として、全存する増注本を用い本文の校勘を行うこととしたい。

〈延世大学校中央図書館 八二二・一〇八〉

一冊

存卷十四至二十首尾欠

丁子染雷文繫蓮華文空押艶出表紙(二九・四×二二・二糶)。

背面は公印を伴う戸籍。首に卷二十第十二張前半(現存末尾)

を錯綴し、次葉より卷十四第五張以下の本文に入る。卷十五の

首も欠く。卷十六首匡郭二四・八×一七・〇糶。

篇目上に墨標点書入あり。

〈延世大学校中央図書館 八二二・一〇八〉

一冊

存卷十一至十五尾欠

後補淡丁子染表紙(三五・一×二二・四糶) 左肩打付に「聯珠

詩三」と書す。背面雜詩稿。本文破損修補。卷十五第十二張以

下を欠く。

墨藍兩筆にて篇目標点を加え、欄上に墨標注を存す。首に单辺

方形陽刻不明朱印記あり。

同 朝鮮(徐居正)増注

朝鮮刊(甲寅字)

甲寅字本の第二種は、朝鮮朝及び日本の江戸時代に流行した、本書徐居正増注本の祖に当たり、毎行に十七字の款式を特徴とする。現在まで後掲二本の伝存を見るのみ、その他、未見の韓国玩樹文庫蔵本の著録を検出できたものの、やはり十全には述べることができない。但しこれも、後出の覆刻本によって、その全体を推し測ることができる。まず甲寅字残本によって知られる点を次に示す（図版五）。

卷首題「精選唐宋千家聯珠詩格卷之十八／（低六格）番易默齋于

〈濟〉 徳夫／建安蒙齋蔡〈正孫〉粹然（編集） 用分付字格

〈陰〉 小軒（隔八格） 陸放翁等、次行より本文。編目に標

出の文字は墨囲陰刻（木活字）。傍点、傍圈附印。毎句下に蔡

氏批注及び「増註（陰刻）」以下徐注（小字）を差夾む。各聯また

は全篇に渉る批注は後掲。毎篇改行。

卷之十七（首欠、三二張）〔用留得字格〕―用不用字又格

卷之十八（一九張）用分付字格―用羣負字格

卷之十九（二六張）用兩目字格―用枉字格

卷之二十（存第一至十六張）用至今字格―〔用後身字格〕

单辺（二五・二×一六・九種）或は四周双辺、有界、每半張九行、行十七字。甲寅字。版心中黒口（双辺時、接内周）、双線黒魚尾（対向）

問題「聯珠詩幾」、張数。

該本の刊行年次について、左記伝本中には明徴を得られないが、後出の覆刻本に附された安琛の跋に拠ると、本書増注本は初め成宗二十三年（一四九二）に活字にて印行されたと伝えられ、現在目にし得る増注活字本は、当該の一種のみであり、また該本所用の甲寅字は世宗十六年（一四三四）に鑄造され、後の壬辰倭乱（文祿の役、一五九二）まで使われ続けたのであるから、これを刊年に当て得る可能性が高い。

徐居正、字は初め子元、のち剛中と改め、四佳亭と号す。慶尚道達城の人。朝鮮世宗二年（明永樂十八年、一四二〇）生、同二十六年文科及第、世宗、文宗、端宗、世祖、成宗の五朝に歴仕し、成宗元年（一四七〇）左賛政に至る。かつて世宗より賜暇讀書を得て、その学識は甚だ博く、著す所『経国大典』『東国通鑑』『東文選』『東人詩話』等、多岐に渉り、同十六年、本書の注解を作つて成宗に進めた（後述）。同十九年（明弘治元年、一四八八）歿、享年八十九。諡号は文忠公。

〈高麗大学校中央図書館華山文庫 貴・五六A〉 一冊
存卷十七至二十首尾欠

黄檗染雷文繫蓮華文空押艶出表紙(三〇・一×一八・九糎) 左肩付に「聯珠詩格(四)」と書す。破損修補。前後副半葉。

墨標圈、傍線書入あり。前副葉に単辺方形陽刻「邦/彦」朱印記、同「黄應/綸甫」朱印記、方形陰刻「檜/山」朱印記、単辺方形陽刻不明墨印記、単辺円形陽刻不明朱印記、首及び第二葉に単辺方形陽刻不明朱印記二顆(鈐重)を存す。¹⁴⁾

〈大韓民国国立中央図書館 貴四九七 古三七一五・四八〉一冊

存卷十八至十九

新補黄色雷文繫蓮華文空押艶出表紙(三一・三×二二・〇糎)

内に丁子染蓮華唐草文空押艶出表紙を存し、左肩黄檗染題簽を貼布し「精選唐宋千家聯珠詩格卷十八之十九」と書す。

稀に墨点の書込あり。¹⁵⁾

同

朝鮮明弘治十五年(一五〇二) 跋刊

覆朝鮮甲寅字刊増注本

本版は、初めて徐居正の増注を加えた、前出の甲寅字行十七

字本を基とする覆刻本で、本版の伝存により却って、甲寅字増注本の全容を推知することができる。また本書の朝鮮諸本中、最も伝存数の多いのもこの版本で、流布の版種と見られよう。

まず蔡正孫序(第一至二張)、首より本文(上略) 歳庚子/春三月蒙齋野逸叟蔡(正孫)粹然書于方寸/地。款式字様、本文に同じ。印記摹刻は欠く。以下同。

次で王淵濟序(第三張)、首より本文(上略) 大徳己亥花朝王淵王(淵濟)道了敬書/于龍湖書堂。

次で于濟序(第四張)、首より本文(上略) 徳西孟商番易默齋于(濟)徳夫序。

次で総目(一〇張)、首題「精選唐宋千家聯珠詩格總目」(格^{低六})

(番)易默齋于(濟) 徳夫/建安蒙齋蔡(正孫)粹然 編集、次行一格を低して卷数、次行より二、十格を低して編目を標す。

卷之二十「用後身字」に至る。尾題同首。

卷首題「精選唐宋千家聯珠詩格卷之一(至二十)」(格^{低六}) (番)

易默齋于(濟) 徳夫/建安蒙齋蔡(正孫)粹然 編集/

四句全對格(刻除) / 漫興(注^有) / (格^{低十}) 杜工部、次行よ

り本文。編目に標出の文字は陰刻。傍点、傍圈附刻。毎句下に蔡氏批注及び「増註(刻除)」以下徐注(小字)を差夾む。各聯ま

たは全篇に渉る批注は後掲。每篇改行（図版六）。

卷之一（一九張）四句全對格——起聯物喻物對格

卷之二（二〇張）後聯對句格——後二句疊字相貫格

卷之三（二三張）第一句疊字格——第四句貫頭兩句格

卷之四（二九張）用只今字格——用如何字又格

卷之五（二六張）用今日字格——用近來字又格

卷之六（二九張）用須臾字格——用逢入字格

卷之七（二九張）用自字格——用無情字格

卷之八（二五張）用無消息字格——用不作字格

卷之九（二三張）用引得字格——用不信字格

卷之十（二九張）用聞說字格——用偷字格

卷之十一（二六張）用從今字格——用何処字又格

卷之十二（三一張）用可是字格——用不然字格

卷之十三（二五張）用只合字格——用不見字格

卷之十四（二五張）用見字格——用人不到字格

卷之十五（二〇張）用直字格——用看字格

卷之十六（二四張）用吟字格——用誤字格

卷之十七（二三張）用留得字格——用不用字又格

卷之十八（一九張）用分付字格——用辜負字格

卷之十九（二六張）用兩自字格——用枉字格

卷之二十（二〇張）用至今字格——用後身字格

单辺（二三・三×一六・八糶）有界、每半張九行、行十七字。

甲寅字体。版心中黒口、双線黒魚尾（向対）問題「聯珠詩幾」、

張数。卷尾題「精選唐宋千家聯珠詩格卷之二」等、大尾題「精

選唐宋千家聯珠詩格卷之二十終」。

次で安琛跋（二張）、首より本文（低一格「諱字單據」）（上略）成化乙巳

年間達城徐公居正増為註解／頗詳密後七年我／成宗大王命臣

琛及成倪蔡壽權／健申從濩將徐註重加補削既／獻用鑄字印頒而

猶未廣布今／年余在合浦鎮雞林尹愼公承／福判官奇侯禧以簡報

余曰近／以増注聯珠詩格録于梓思廣其／傳請為我跋之仍遺新印

一本余／乃書其尾曰（中略）弘治壬戌夏竹溪安琛／子珍書于合

浦樂閑堂之在心軒（書行）。八行十四字格（図版七）。

成化乙巳は二十一年（一四八五）、弘治壬戌は十五年（一五

〇二）。この跋を記した安琛は、字は字珍、竹窓また竹溪と号

す。江原道順興の人。世宗二十六年（明正統九年、一四四四）

生。世祖十二年（明成化二年、一四六六）、江原道に幸し士を

取るに際して登第、仕官。成宗二年（明成化七年、一四七二）

藝文館を設けた時、副修撰となる。以後成宗、燕山君、中宗朝

に藝文館提学、諸道觀察使、諸曹参判等の頭官を歴任し、知敦寧府事に至る。中宗十年（明正徳十年、一五一五）歿。諡号は恭平。その跋に拠れば、既に東方に流布していた本書に対し、成化二十一年、即ち朝鮮成宗十六年、徐居正が詳細な注を附し、七年後の弘治五年、即ち成宗二十三年（一四九二）、成宗が安琛、成俔、蔡壽、權健、申從濩の五名に命じ、重ねて徐注に補削を加え、鑄字を用いて印出頒行せしめた、という。

成俔、字は馨叔、慵齋と号す。慶尚道昌寧の人。世宗二十一年（一四三九）生、世祖八年（一四六二）科第、工曹判書等を歴任し、燕山君十年（一五〇四）歿。蔡壽、字は耆之、懶齋と号す。京畿道仁川の人。世宗三十一年（一四四九）生、叡宗元年（一四六九）科第、弘文館提学等を経て、中宗十年（一五一五）歿。權健、字は叔強。擘の子、慶尚道安東の人。世祖四年（一四五八）生、成宗六年（一四七五）科第、知中枢府事等を経て、燕山君七年（一五〇二）歿。申從濩、字は次韶、三魁堂と号す。叔舟の孫、慶尚道高靈の人。世祖二年（一四五六）生、成宗十一年（一四八〇）科第、京畿道觀察使等を経て、燕山君三年（一四九七）歿。

そして、安琛等が徐注に補削を加え活字刊行した後、十年を

経た弘治十五年に至り、雞林（慶州府）尹の慎承福と、同判官奇楮が、本書増注本のさらなる広伝を謀って版刻に及び、嘗て活字本の整訂に関わった安氏に跋を求めてきた、というのである。慎承福の伝は未詳、慶尚道居昌慎氏出身で詮の子、承命、承善の弟。成宗朝から燕山君朝頃の官人、知中枢府事に至る。奇楮も同時期の官人。字遂良、京畿道幸州の人。成宗二十一年（一四九〇）登第、藝文館奉教等を歴任した。この兩名の跋中の官職から言うと、本版は慶州府の刊行と見られるが、『攷事撮要』の冊板目録を見ると、全羅道羅州と慶尚道慶州の項にそれぞれ「聯珠詩格」とあり、現在認められる本書の増注整版本は本版一種のみであるから、恐らくは本版がこの慶州蔵版本に当たっている。また跋中、先行の活字本と新版の繋連については必ずしも明らかではないが、覆刻と判ぜられる増注甲寅字刊本と本版の二種の關係が、そのまま宛てられる。

右の安跋を見ると、徐居正増注本を中心とした朝鮮朝に於ける本書流布の経緯が窺われる。成宗十六年（一四八五）の増注成立以前、既に本書が世に行われていたという記述は、本書元明版の伝来を意味し、或いは、前掲の蔡正孫単注本二種の伝存と対応するにも思われる。そして成宗朝後半期の徐居正増

注の登場、さらに、中央の活字印刷と地方の整版印刷を組み合わせた、安氏、慎氏等の文臣の出版活動によって、本版による「増注聯珠詩格」流布の状況が生み出された。この間の経緯は、印刷史的に見ると、世宗朝に興った出版活動の延長上に位置するもので、その餘慶は直接間接に近世の日本に及んだ。

該版の本文について、既述の「南北朝」刊本に比較すると、甲寅字本以来、蔡氏評釈を夾注として後掲する款式を採用、さらに徐氏増注を加えたのであるが、詩篇及び蔡注に関する限り、校合を妨げるような甚しい相異は認められない。本文の構成に關わる異同としては唯一、卷十八「用幾回字格」、張武子「闕恨」篇後に、「南北朝」刊本（以下、便宜「南本」と仮称する）は五行空白（一張の末尾）であるのに対し、該本では作者名を欠いた「謝寄羊裘」一篇を置く相異がある。ただ南本はまた、同「用十年字又格」、何応龍「春風樓」篇後に五行の空白（同じく一張の末尾）を有するが、この箇所には該本も別篇を存せず、直接次の「用辜負字格」に続く。上記について、日本の文化元年刊行に係る大窪詩仏校訂本では、二箇所共に詩篇を存し、標注によると「元板」と校合して、前者「謝寄羊裘」篇には「朱文公」の作者名、後者には葉唐卿「自贊」篇を存する。二

箇所の空白は南本の体式として異例である上、両者共に蔡氏批注を伴うから、もと両篇を存していたが、何らかの故障を生じ、該本にその一方を遺存した、と見るべきであろう。また顕著な異同として、南本は、首を除くと題目に「精刊」二字を冠する巻が多かったが、該本では全て「精選唐宋千家聯珠詩格」の形に統一されている。このことは尾題も含め、徴し得る限り全ての朝鮮本に通底する。また每卷首第二行の署名「番禺黙齋于濟徳夫」の「番禺」の文字につき、該本は全て「番禺」に作り、これも朝鮮諸本に通じて認められる。この二字は、于氏の貫籍地「鄱陽」の略であるから、「易」が正しい。但し南本の字体も中間的である上、「易」の混用が見られ、また本文中「周易」等、「易」とあるべき字を「易」にも作るから、両者はもと曖昧な字体により相互に通用され、南本にはその情況が踏襲されて、朝鮮本では、活字翻印によって「易」に統一されたのであろう。これを要するに、「南北朝」刊本と該本は、系統を別にしながら根源を一にし、後者については、活字による統一的文形成が特色を作り出したと言える。

引続き「南北朝」刊本との異同を見ると、南本序十一後四「觀者不識其有格」を、該本に「不識」に作り、目一六後四

「用多少字／用消磨字 用多少字／用不信字 用留與字」を
「用多少字／用消磨字 用留與字／用不信字」に、目一十二後
六「用不用字 用了字／○卷之十八 用不用字」を「用不用字
用不用字／○卷之十八」に、一一後八・蘇東坡「溪陰堂」
（侵韻）承句「綠槐高處一蟬鳴」を「二蟬吟」に、一一五後十・
林鴻「泊湧金門」軼句「此景此詩描不盡」を「此景此時」に、
二一二後九・（蔡）蒙齋「梅花」結句注「司馬公贊云、深衣大
布」を、「深布大帶」に、二一六後十・葉苔磯「西湖值雨」結
句「變作元暉水墨圖」を「水墨圖」に、二一八後二・李宗易
「靜居」前聯批「為一身之主」を「心為一身之主」に、三一二
前十・寶鞏「別墅寄兄」後聯批「可見得而山之樂」を「西山之
樂」に作り、三一五後二「黠別」篇の題下に「鄭合」とあり、
三十二前二・賈公餗「諷蔡文忠」篇注「日飲醇醪」を「醇酌」
に、四一二前二・杜牧之「悵別」篇注「愛而約之以卜年」を
「十年」に、四一七後九・趙小山「餞別」後聯批「惜別可寧」
を「丁寧」に、四一十三後九・王秋江「戲為」後聯注「言尤高
當有哩會處」を「哩會處」に、四一十四後九・韓偓「翠禽」後
聯注「勉其當擇地而陷」を「擇地而陷」に作る等、該本によつ
て南本の誤りを正し得る箇所が非常に多い。このうち卷一「溪

陰堂」、卷二「梅花」「西湖值雨」「靜居」、卷三「別墅寄兄」篇
の例は、該本の文字が文安元年写本と共通しており、南本の文
字は、同本もしくはその底本に特有の誤文と見ることができ
る。しかしその他の箇所では、南文両本が共通し、該本によつて正
される格好で、文本のみ孤立する場合は比較的稀と言え、やは
り南文両本と該本とは、別系を成すものと看取される。これら
の異同は、徴し得る限りの朝鮮諸本にも共通であるから、少な
くとも、その淵源に当たたる甲寅字本以来の本文と解される。さ
らに甲寅字本の底本となつた版本にまで遡るかどうかが、明らか
な誤文については、徐居正や朝鮮朝校官の見識に基づく変更と
いう可能性も保留されなければならない。ただ、別に南本二一
五後四・羅隱「杏花」後聯批「所謂榮華草木三飄風」の「三」
字（「之」の誤り）を、該本には欠き、三一二後三・王荊公
「夜直」起句「金爐香燼漏聲殘」を「香盡」に、三十二前九・
陳希夷「贈神隱者」起句「事不関身皆是累」を「事不關心」に、
四一三後三・翁施龍「過鑑湖」承句「今日烟波太半無」を「大
半無」に、四一九前二・無名氏「嵩山寺壁」を「崇山寺壁」に、
四一十六後二・唐求「題常樂寺」前聯批「摸寫梵宮佳處」を
「描寫」に作る等の例は、南文両本と該本とが対立し、本文と

してはどちらとも取り得るだけに、全て意改と見なすわけには行かないから、先に挙げた事例の幾つかも、甲寅字本以前の本文に基づくであろう。なお南本に三―四前二・韓偓詩題目「尤溪道中」を「元溪」に誤り、三―五前八・(黄)山谷「示姪」注「山谷姪相、字惟深、小字韓十。知命第二子。時相隨知命舟行」の「相」を「相」に、四―二前六・杜牧之「悵別」軼句「如今風擺花狼藉」を「花狼籍」に、四―八前五・韋応物「即日」軼句批「此即事之語」の「此」を「比」に誤る等の例は、該本にも同様に正文を得ないことから、両者別系といえども、遠く源を一にすることが窺われる。

これに対し、南本序―前一「正孫詩林廣記陶蘇詩話」二編殺青之後」を、該本に「詩林廣紀」に作り、序―七後二「無二不招誨于其下」を「不招誨」に、序―十後二「王(淵濟)道可」を「道了」に、目―二前四「第一句疊字格」を「第二句」に、目―十後五「用直字」を「用真字」に、一―七前九・王秋江「戲為」承句「字若羲之祗俗姿」の「羲」を「戈」左傍墨釘に、一―九前一「起聯物喻人對格」の編目を「起聯喻對木格」に、二―三前五・王元之「笋」後聯批「虽善於比物」を「雖善於比」に、二―三後十・(劉克莊)「葵花」結句「不似葵花識太陽」を

「識太陽」に、三―五前八・(黄)山谷「示姪」篇注「山谷姪相、字惟深、小字韓十。知命第二子」を「知命弟」に、同十一・同軼句「清江濯足隱下坐」を「坐窓下」に、三―六前六・(方)秋厓「梅邊」結句「爲予寫作百梅圖」を「爲子」に、三―十一前十・朱聖錫「贈月篷」後聯批「非其他貢諛者比」を「貢諛者此」に、四―二前四・杜牧之「悵別」起句「自恨尋芳已太遲」を「已大遲」に作り、四―五前七「吳越」篇題下「唐人」を欠き、四―五後七・蕭雲麓「晚步」承句批「二字佳」を「二字佳」に、四―十五後三・周葵窓「晚春湖上」承句「輕寒猶是牡丹天」を「牡丹天」に、四―十六後十・(蔡)蒙齋「春暮」軼句「千紅萬紫都狼藉」を「都狼籍」に作る等の例を見ると、南文兩本に対する該本の不備も少なからず認められ、必ずしも前者に優るとは断言できない。特に小字細行の批注に関しては、殆ど増刪の見られない枠組みの堅実さに反し、文字の動揺が相応に甚しく、互いに正し、或いは拮抗する場合が屢々見られる。また卷三「示姪」軼句の異同を見ると、語順や今体詩の平仄に照らして、該本の方が正しく見えるが、黃庭堅の本集では南本の形が取られており、ここでも該本もしくはその依拠本の、意改という可能性を考えてみなければならぬ。なお南本に対する該

本の誤りには、朝鮮諸本に共通して見られるものと、該本に特有のものが複合している。そこで朝鮮諸本の中に於ける該本の地位については、さらに他本との対校を要するため、次版を検討した後に再述したい。

該本の用字の特色は多岐に涉っているが、端的な事例のみに言い及ぶと、南文両本に比べ、「懼」「學」「童子」「曹」「淵」「實」「條」「第」「答」「兩」「從」「等」「儘」「屬」に作り、また例えば、「隨」に、「蓋」を「映」に、「映」を「映」に、「映」を「映」に作る等（小字細行は必ずしも同じからず）、南文両本の正字を略字俗字に改めた字種もある。これらはやはり、全般に南文両本と対立し、他の朝鮮諸本とは共通する異同と認められる。南文両本は、共に元本に基づきつつ直接の関係にはないのであるから、例えば南文両本に通底している、批注を略体にする方針等は、初刻時の姿を伝える可能性がある。そう考えると、該

本等朝鮮本の用字は、依拠の底本となった別の元明本と言うより、朝鮮朝の正字観に基づく甲寅字の運用に従った形と思われる。つまり、本書朝鮮諸本に一貫して、銅活字翻印による影響が強く現れており、誤文の補正とも関連して、本文整訂の著しい系統と見る必要があろう。

以下に本版の諸本を挙げ、その伝播の一端を見たい。

〈高麗大学校中央図書館晩松文庫 貴五六B〉

存卷四至六

一冊

丁子染艶出表紙（三一・〇×二〇・七糎）右肩より左肩にかけて打付に五次「聯珠詩」墨書。改糸。前見返し「聯珠詩」他、書込多し。卷四首匡郭二三・〇×一六・五糎。後見返し詩草。

墨標圈、傍点書入。首右辺外下方「大明成化乙巳開刊始行于世」墨書、末尾左辺外に「主安東權氏」墨識墨減、同行下「主永李」墨識、首並に第二葉に単辺方形陽刻「〈安／東〉〈權／李〉」藏一藍印記を存す。

「大明成化」云々の書人は安跋に拠るか。但しその場合、成化乙巳は徐注成立の年次を指すから、本書の取意は正確でない。

〈高麗大学校中央図書館薪庵文庫 貴五六〉 一冊

存卷十一至十三 首欠

丁字染雷文繫文空押艶出表紙(二九・〇×二〇・五糎)背面漢

字諺文交り整版本。破損修補。首三張欠。卷十二首匡郭二三・

五×一六・八糎。

卷十一のみ篇目朱罫、稀に墨鈔補、標注書入。末尾題後「聯珠

詩」墨書、同行下に花押を存す。首に石形陰刻「青菊」朱印記、

单边方形陽刻有界(書横)禹鎭／第「566」號／臧書」朱印記

(「」内ペン書)あり。

〈高麗大学校中央図書館晩松文庫 貴五六D〉 一冊

存卷十七至十八 首尾欠

表紙欠(三二・二×二二・六糎)。首三張欠、卷十八第五張以

下欠。卷十八首匡郭三三・五×一六・九糎。

稀に藍筆にて標圈書入を存す。

〈延世大学校中央図書館 貴七九五／八二二・一三〉 二冊

存卷五至八 首尾欠 卷十二至十四配同版後印本

丁字染艶出表紙(三二・九×二〇・六)左肩打付に「聯珠詩格

「」と書す。背面甲寅字体整版本。剥離した前見返し背面に

別筆にて「聯珠詩格」と、又別筆にて同文の書。卷五首一張欠、

卷八第二十四張以下欠。卷六首匡郭二四・二×一六・八糎。

墨標傍句点、傍圈書入。卷六、七尾、卷七、八首に单边方形陽

刻「鳳城／後人」朱印記を存す。

〈延世大学校中央図書館 八二二・一〇八〉 四冊

存卷四至六十至五十八至二十 朝鮮金富弼旧藏

黄檗染雷文繫菊花文空押艶出表紙(三二・七×二一・二)左肩

打付に「聯珠詩格(幾之幾)」と書す。卷四首匡郭二三・三×

一六・七糎。

墨標圈、傍点、欄上校注書入。淡標色不審紙を存す。每冊前見

返しに「後彫堂藏」墨識(金富弼)、別筆にて首辺外に「金(花押)

と、尾辺外に「光城家寶」墨識、首冊後見返しに又別筆にて

「光城家寶卷之六」墨識あり。

金富弼、字は彦遇、後彫堂と号す。光山金氏礼安派の人。中

宗五年(一一一〇)生、明宗朝の生員で、李滉の門弟。別集

「後彫堂集」あり。宣祖十年(一一七七)歿。²⁰⁾

〈延世大学校中央図書館 八二二・一〇八〉

一冊

存卷五至八 首尾欠

後補素表紙(三一・三×二〇・五糎) 中央打付に「聯珠詩(卷之五)」と書す。首六張並に末尾欠。

刻「星吾海／外訪得／秘笈」、方形陰刻「飛青／閣臧／書印」朱印記(二顆、楊守敬所用)を存す。

楊氏『日本訪書志』卷十三録²⁾。

藍句点、傍線書入。首第三葉並に每卷首辺外に「主金(花)墨識あり。首に単辺方形陰刻「社堂上(楷)墨印記を存す。」

〈延世大学校中央図書館 貴七九五／八二二・一三のうち〉

存卷十二至十四 尾欠 卷五至八配同版早印本

〈台北・故宫博物院 楊氏觀海棠舊藏書〉

十冊

洪、江抽斎 森枳園 清黎庶昌 楊守敬旧藏

後補藍色艶出表紙(三一・六×二一・二糎) 第八至十冊左肩打付に「聯珠詩格(卷幾幾)」と朱書す。改糸、素絹包角。天地截断、襪紙改装。前後副葉。原序、総目を存し本文。每冊二卷。末尾に安跋を存す。

三卷を存す(三冊のうち一冊)。素表紙(三三・〇×二一・五糎) 左肩打付に「聯珠詩」と書す。紙釘仮綴じ。卷十四第十三張以下欠。卷十二首匡郭三三・八×一六・五糎。欄上墨標注書入。首辺外「主光山金(花)墨識。首並に卷十二第二十二張前半に単辺方形陽刻「宗家／寶藏」朱印記を存す。

〈高麗大学校中央図書館晚松文庫 貴五六C〉

一冊

前半間々朱豎傍点、傍圈、句圈(詩篇)、句点(注)書入、稀に欄上墨補注、極稀に校改書入。縹色(浅葱色、代赭色)不審紙を存す。每奇数冊首に単辺方形陽刻「弘前醫官澁／江氏藏書記(楷)朱印記(洪江抽斎所用)、単辺亀甲形陽刻「森氏開萬

存卷一至四 尾欠

表紙欠(三三・五×二一・二糎)。原序(首一張半欠)、総目を存し本文。卷四末半張欠。卷首匡郭三三・四×一六・八糎。

／冊府之記(楷)朱印記(森枳園所用)、首並に卷首に方形陰刻「遵義黎／庶昌之印」朱印記、首並に第九冊首に単辺方形陽

〈誠庵古書博物館 四一・二八二(一〇六六)〉

三冊

存卷九至十一 尾欠

卷十三至十六 十八至二十各配同版別伝本

後補焦茶色艶出表紙(三一・二×二一・七糎)。卷十二尾三張欠。卷九首匡郭二三・五×一六・八糎。

稀に墨傍点、每巻首欄上「唐宋」標注書入。首尾に単辺方形陽刻不明朱印記四顆、重鈴して同墨印記一顆を存す。

〈誠庵古書博物館 四―二八二(一〇六六)のうち〉

存卷十三至十六

卷九至十二 十八至二十各配同版別伝本

四巻を存す(三冊のうち一冊)。後補焦茶色艶出表紙(三一・

三×二一・四糎)外皮殆ど剥離、露出した素紙左肩打付に「精

選唐宋聯珠詩」と大書す。後見返し詩草。卷十三首匡郭二三・

四×一六・六糎。

墨傍点書入。首に「冊主金(押花)」墨識並に鐘形不明、双辺円形中単辺方形陽刻不明墨印記、尾に「李(押花)」墨識を存す。

〈誠庵古書博物館 四―二八二(一〇六六)のうち〉

存卷十八至二十 首尾欠

卷九至十二 卷十三至十六各配同版別伝本

三巻を存す(三冊のうち一冊)。外皮剥落表紙(三一・八×二一・六糎)左肩打付に「聯珠詩」と書す。背面「書傳諺解(題柱)活字本(每半張十行、白口花口魚尾)卷五等。首四張、尾三張欠。卷十九首匡郭二三・三×一六・五糎。墨傍圈、傍点、補注書入あり。

〈韓国学中央研究院蔵書閣 D五C・九〇(フィルム)〉 一冊

存卷十三至十六

表紙左辺打付に「聯珠詩」と大書し、中央打付に別筆にて又「聯珠詩」と大書す。見返し詩草。

墨欄上標圈(每篇首)、補注書入。首に方形陽刻不明印記あり。

同

〔江戸初〕刊 覆朝鮮甲寅字刊増注本

甲寅字増注本は、朝鮮朝に続いて、日本でも覆刻された。その正確な刊行時期は明らかでないが、後述する寛永九年後印本の存在から、寛永年間(一六二四―四四)半ばを遡るものと思われる。また上限については明徴を欠くが、版本の様式を見る

と、室町末近世初以前に遡るとは思われないから、明弘治十五年（一五〇二）即ち成宗二十三年頃刊行の前掲覆版よりも後出であろう。ただ彫板は精確で、その寸法や字様を見ると、弘治覆版ではなく直接甲寅字本に拠ったものと知られる。なお、これらの覆刻甲寅字増注本二種は混同される可能性が高く、実際に、日本版を誤って朝鮮版と著録する事例が見受けられる。以下、版本の概要につき、甲寅字本や弘治刊本と異なる点を記す。題簽あり、双辺「聯珠詩格 へ幾之幾」。

首に原序三篇と総目を存すること諸本に同じ、款式字様、前版に同じ。

巻首題目と本文内容も前版に同じ。但し諸本の詩句本文の右に附された傍点について、本版では右傍の界線を、字間に合わせ区切るのみにて点の形を成さず、巻首以外ではこの処置を殆ど欠く。なお圈発については、存する限り諸本の形に従う（図版八）。各巻張数もほぼ前版に同じ、但し巻十四は、前版には二十五張であったものを、本版には尾題のみ存する第二十六張を存し、却って甲寅字本の原態を反映するかと見られる。

単辺（二五・〇×一六・七糎）有界、每半張九行、行十七字。

甲寅字体。版心中黒口、双線黒魚尾（対）問題「聯珠詩幾」、

張数。寸法の他、前版に同じ。

該版の本文を、既に見た〔南北朝〕刊本や弘治十五年跋刊本（以下「弘本」と略称）に比較すると、大略、南本に對立する点に於いて、該本は弘本に共通する。例えば前節で、弘本によって南本の誤りを正し得るとした箇所は、全て該本も弘本に同文である。弘本と該本は共に甲寅字本の覆版であるから、こうした箇所は甲寅字本以来の本文を汲むものと見られる。ただ弘本と該本を比較すると、両者の異なっている箇所も皆無ではない。

例えば南本と弘本が對立し、明らかに後者が誤っている箇所に於いて、該本も多く同様に誤るが、南本序一七後二「無一不招誨于其下」を、弘本が「不招誨」に誤る所、該本は誤らず、目二前四「第一句疊字格」を「第二句」と誤らず、一七前九・王秋江「戲為一承句「字若羲之祇俗姿」の「羲」に墨釘を用いず、一九前一「起聯物喻人對格」の編目を「起聯喻對本格」とせず、三一六前六・（方）秋厓「梅邊」結句「爲予寫作百梅圖」を「爲子」とせず、四一前四・杜牧之「悵別」起句「自恨尋芳已太遲」を「已大遲」とせず、四一五後七・蕭雲麓「晚步」承句批「二字佳」を「二字住」とせず、四一十五後三・周葵窓「晚春湖上」承句「輕寒猶是牡丹天」を「牡丹天」としな

い等、該本では南本と同文に作って誤らない例を見ると、弘本は相応に、独自の誤文を含んでいたことがわかる。甲寅字本と直接対比可能な箇所で見ると、二十一十六後八・陳后山「以竹杖供仁山主」後聯批「此是老僧一生用不尽底」の「一」字を、弘本には欠くが、甲寅字本、該本共にこれを欠かない。弘本誤文の原因は、覆刻時の故障が第一に考えられるけれども、朝鮮銅活字本の常態として、印出後の校改に複数段階を生じていたことも、視野に収めなければならないであろう。またこれに関連して、目十後五「用直字」を、弘本は「用真字」と誤るが、該本は弘本同様に作りながら右傍に「直乎」と細字を附刻し、二―三前五・王元之「箏」後聯批「虽善於比物」を、弘本が「雖善於比」と「物」字を欠くのに対し、該本は二格に「於比物」三字を収め、四―八前五・韋応物「即日」転句批「比即事之語」と、諸本に誤る所を「此」に作る等、甲寅字本以前からと思われる誤文を、独自に改めた所があるから、全て弘本の覆刻の誤りに由来するのではなく、部分的には該本の校改または意改に帰する可能性を存する。また比較的少数ではあるが、南本一―八後二・楊時可「求硯」篇注「時人呼曰筆公」を、該本に「時以呼」に作り、二―六前一「後聯以物比物格」編目を

「北物格」に、四―一前八・李太白「蘇臺」後聯批「此語有感概意」を「咸概意」に、四―七後三・張国香「遇友復別」起句「梅花江上訴心期」を「江止」に作る等の例は、該本の誤りと見られるが、いずれも弘本には誤っておらず、常に該本のみが甲寅字本を正しく反映するとは限らない。字体の問題についてはほとんど弘本と同じ方針に則るから、例証を繰り返すことはしないが、やはり両者相俟ち、甲寅字本の姿を映すことが確認される。

右には元本との関係を軸に考証を進めてきた都合上、徐居正の増注には触れずに来たが、ここで徐注につき弘本と比較してみると、共に甲寅字本に基づき異同は稀であるが、それでも弘本一―四前六左・夏竦「及第」後聯注「有老宦者曰」を、該本に「有者宦者曰」に作り、二―二後二右・東坡「虔州寺」題注「本集註虔州八境圖」を「本集詩」に、四―十二後九左・韋応物「即日」前聯注「許由巢父之比也」を「此也」に、七―一後八左・陳筑「春晴」篇注「既至官惑一倡周氏」を「至宮」に、八―二十四後九右・魏菊莊「贈寫神傅生」後聯注「禮記、良治之子必學爲裘」を「良治之予」に、十一―三前五左・張蒙泉「一逕」篇注「往來無心而領取洒落之景」を「領取洒落」に、十一―

二十九前五・陳亞「次周輔韻」転句注「叵、不可也。後漢呂布指劉備曰、是兒最叵信耐忍也」の「叵」を「巨」に、十一―十九前四左・張安国「約食河豚」題注「肝與卵人食之必死」を「肝與卵」に、十二―七後七左・方秋厓「談命蘇秦」転句注「其以三寸舌下齊七十餘城」を「齋七十餘城」に、十三―二十前六右・劉克齋「春晚」承句注「東坡詩、花香襲杖屨」を「杖屨」に、十四―二十四後七右・（方）秋厓「山眠」篇注「明朝可容一榻」を「明朝」に作る等の例は、みな該本の誤りであつて、字形の類似に由来する不備であることも、容易に想像がつく。右は偶々気付き得た例を記したのみであるが、一方で、弘本二十一―前八右・吳融「華清宮」起句注「有汶溜澗水」を、該本に「洪溜」に作り、二十一―十七前九左・蕭冰厓「上巳」篇注「長安木邊多麗人」を「水邊」に作るが、これらの箇所では甲寅字本と比較することができ、いずれも該本が底本に忠実に判明するから、やはり相互の参考が欠かせない。

以下、該版諸伝本の現況を列記する。

〈宮内庁書陵部 五五七・二三〉

十冊

栗皮表紙（三一・八×二一・二糶）左肩刷題簽を貼附。五針眼、

改糸。一部裏打修補。原序、総目を存し本文。每冊二卷。

〔江戸初〕朱豎傍句点、同墨返点、連合符、送仮名書入。別朱豎傍句点、間々返点、送仮名、同朱墨欄上行間補注書入あり。

每冊首に單辺方形陽刻「藤隆／原豊 朱印記（七条隆豊所用か）、同「詩僊／堂印」朱印記（石川丈山所用か）を存す。第七冊尾に「嘉永七年甲寅五月喜施／（格八）以文會社中」墨識あり。

〈東洋文庫 IV・一・八二九〉

十冊

栗皮表紙（三一・八×二一・二糶）左肩刷題簽を貼附。中央打付に「大」と白書、右下方「ロノ六」墨書、左下方「ヲノ四」朱書。本文楮打紙、虫損修補。五針眼、改糸。見返し並に前後副葉新補。原序、総目を存し本文。每冊二卷。卷三第十九張を卷三末尾に錯綴す。

首のみ〔江戸初〕墨返点、連合符、送仮名書入あり。

〈市立米沢図書館 米澤善本一三七〉

十冊

黄檗染雷文繫蓮華唐草文空押艶出表紙（三一・二×二一・二糶）左下方打付に冊数、中央に「集十五」と書す。左肩淡縹色雲霞波濤文様の題簽を後補し、別筆にて「唐宋聯珠詩格」と書す。

五針眼、改糸。本文楮打紙。原序、総目を存し本文。每冊二卷。
朱堅句点、〔江戸初〕墨返点、連合符、送仮名書入、淡黄、淡
紅不審紙あり。末冊後見返しに単辺凹形陰刻不明墨印記、每冊
首に単辺方形陽刻「米澤藏書^(書)」朱印記を存す。⁽²³⁾

〔東京大学文学部漢籍コーナー〕 集部・総集類 十冊

香色艶出表紙(三〇・三〇・三〇・三〇・三〇・三〇・三〇・三〇・三〇・三〇) 第五、九、十冊は左
肩打付に「聯珠詩格」と書す。五針眼。淡青包角。每冊前見返
しに篇目を列記す。原序、総目を存し本文。每冊二卷。

朱堅句点、傍圈、欄上朱墨韻字詩語等標注、校注〔江本〕「江
戸大本標註」「詩人玉屑」参照⁽²³⁾ 校改、本文返点、連合符、音
訓送仮名書入、代赭色不審紙あり。每冊首に単辺方形陽刻「良
臣ノ之印」朱印記、卷首並に每冊首に「讓ノ□」朱印記、每冊
尾に単辺凹形陽刻「吟ノ風弄ノ月」朱印記、卷二十首題下に単
辺紡錘形陽刻「柳翠」朱印記を存す。⁽²³⁾

〔慶應義塾大学斯道文庫〕 九二二・ト八八・一〇〇 十冊

大正九年塩谷青山批校書入

焦茶色雷文繫松樹文空押艶出表紙(三二一・四〇二・二種) 左

肩刷題簽を貼附、押し八双あり。五針眼。原序、総目を存し本
文。每冊二卷。

全編に〔江戸初〕墨筆にて返点、連合符、送仮名、間々欄上校
補注書入、朱筆にて附訓補正書入、首に単辺凹形陽刻「今ノ枝
ノ氏」朱印記を存す。また青山筆にて朱傍点、附訓改正、欄外

標校補批注、藍句点書入あり、第三冊尾「大正庚申四月ノ初二
夕細雨適ノ簷」、第四冊尾「大正庚申啓蟄風雨連朝 青山」
以下、卷十九尾「大正九年五月病餘一閱卒業 青山」等の識語
を附す。卷十一第五・六張間に某年二月十八日付竹井耕一郎染
筆「塩谷青山先生」宛書簡を差來む。

〔北京大学図書館〕 □三九三〇〇 十冊

今泉雄作旧蔵

丹雷文繫雨龍文空押艶出表紙(三一・三〇二・三種) 左肩刷
題簽を貼附、押し八双あり。五針眼。原序、総目を存し本文。
每冊二卷。

間々朱堅傍句点書入。每冊前表紙並に首尾に単辺方形陽刻「无
礙菴^(書)」朱印記(今泉雄作所用)を存す。⁽²³⁾

〈大韓民国国立中央図書館 古五・七六・廿一〉

五冊

朝鮮総督府図書館旧蔵

後補香色表紙(二九・五×二〇・〇糶)左肩打付に「聯珠詩格幾」と書す。天地截断。原序、総目を存し本文。每冊四卷。

〔江戸前期〕朱豎句点、墨返点、連合符、音訓送仮名、稀に朱墨補注書入。每奇数冊首に三辺方形陽刻「雪/岑」朱印記、每冊首に単辺方形陽刻「朝鮮總督/府圖書館/藏書之印」朱印記を存す。縹色不審紙あり。⁽²⁶⁾

〈Yale University Beinecke Library YAJ/1a/1b〉

一冊

存卷十三至十六 守山藩主松平頼寛旧蔵

縹色艶出表紙(二九・七×二一・〇糶)左肩双辺刷粹題簽を貼布し「唐宋千家聯珠詩格(自卷十三至卷十六)」と書す。改糸。

卷十三首匡郭二四・七×一六・八糶。

〔江戸初〕朱豎句点、傍圈、同墨返点、連合符、音訓送仮名書入あり。首に単辺瓢形陽刻「觀濤閣」朱印記(松平頼寛所用)を存す。

寛永九年(一六三二)印(京村上平樂寺)

以下の伝本は、大尾題前三行を挖改し双辺有界「惟皆寛永第

九壬申仲春甲辰/於二條玉屋町村上平樂寺(雕開)」蓮牌木

記を存す(図版十・十一)。これらは往々寛永九年刊本と著録されるが、有刊記本の印面を観察すると、前掲の無刊記諸本に比べ同版、いずれも僅かながら後印と認められる。また本文中に板木の補修は見出されないことから、これらを京の書肆村上平樂寺による後印本とした。

〈陽明文庫 レ・二二〉

十冊

黄檗染雷文繫蓮華唐草文空押艶出表紙(二九・六×二〇・九糶)

左肩打付に「聯珠詩格(幾之/幾)」と書す。押し八双。本文楮打紙。前副葉。原序、総目を存し本文。每冊二卷。卷首匡郭二四・九×一六・七糶。

〔江戸初〕墨返点、連合符、音訓送仮名書入、卷一のみ朱豎傍点、欄上行間校注書入あり。

〈お茶の水図書館成實堂文庫〉

十冊

明治三十六年徳富蘇峰圈点書入

栗皮表紙(二九・〇×二〇・五糶)左肩刷題簽を貼附。中央打

付に徳富蘇峰筆にて「寛永板／珍^(大)」、右下方「共十／乾」と朱書す。改糸。虫損修補。原序、総目を存し本文。每冊二卷。卷十三第二十四、二十三張錯綴。

〔江戸初〕朱豎句点、同朱墨返点、連合符、送仮名、墨欄上校注書入あり。每冊首に単辺方形陽刻「若王藏」朱印記を存す。

又蘇峰朱筆にて傍点、青鉛筆にて傍点、標傍圈書入、第三冊尾左辺外下方に「明治三十六年九月念八夕批〔蘇峰生〕」、第四冊尾題前に「此書幼時嘗嘗讀焉今、得購這冊子重寓／目矣玉石混合雖極蕪雜亦有於他集之／中不可得見之佳作也〔明治三十六年十月月初五午後／九時半批畢於青山艸堂矣／于時中秋明月在天一碧／如水氷輪如湧真個／十年無此好中秋矣／^(格低三)蘇峰生識之」朱識、第二冊尾左辺外「明治三十七年六月十一夕再閱蘇峰生」墨識を存す。每冊首に牌中方形陽刻「蘇峰文庫」、單辺方形陽刻大「徳富／猪次郎／之章」、方形陰刻「徳富／猪印」、楕円形陰刻「徳富」、單辺方形陰刻「徳／富^(楷書)」「猪／一郎^(書行)」、円形陰刻「菅／原正／敬」、每冊尾に方形陰刻「菅印／正敬」、單辺方形陽刻「穂／峰」、牌中円形陽刻「蘇峰／學人」、單辺円形陽刻「徳富／猪一郎」朱印記を存す。

〔西尾市岩瀬文庫 七五・一九〕

十冊

江戸月桂寺 岡了允旧藏

後補淡緑色布目表紙（二七・八×一九・〇糎）左肩双辺刷粹題簽を貼布し「聯珠詩格」「幾」と書す。改糸。虫損修補、〔天地截断〕。原序、総目を存し本文。每冊二卷。

每冊尾に双辺方形陽刻「正覺山／月桂寺」朱印記、首に同「傘谿岡氏／了允架藏^(楷書)」朱印記を存す。第九冊首に紙箋を夾み「此冊之印章正覺山／月桂寺トアリ野老所／持之白氏文集モ此印アリ／禪寺市谷大久保ニアリテ／大梵刹ナリシカ八九年前／失火シテ一山コト／ク焼亡ス／其頃散失セルニヤ或ハ／伽藍再興ニ賣却セルニヤ／往、此印書ヲ見ルコトアリ／イツレモ珍書ナリ」墨識（末行のみ剥離）を存す。

〔大倉集古館〕

五冊

鳥丸家旧藏

淡洪引表紙（三〇・〇×二一・三糎）左肩打付に「詩格〔幾幾〕と書す。押し八双あり。五針眼、改糸。原序、総目を存し本文。每冊四卷。

每冊首に單辺方形陽刻「鳥丸文庫」朱印記を存す。

〈国会図書館 鶯・三八二二〉

五冊

釈元政手沢 瑞光寺 川口刀水旧藏

右の他、長澤規矩也氏旧蔵の「寛永九刊」本は、書影に拠る限り同種と思われる。

黄檗染艶出表紙（二八・四×二〇・六糎）、第三冊後は後補香

色卍繫牡丹唐草文空押艶出表紙、左肩打付に「詩格〈自幾至

幾〉と書す。左下方に紅箋を貼布し「刀水珍藏〈茅〉と書す。

右肩鶯軒文庫蔵書票貼附。本文楮打紙。虫損修補。原序、総目

を存し本文。每冊四卷。

朱豎句点、傍圈、稀に返点、連合符、送仮名、傍点、標圈、欄

上行間墨標圈、標校補注書入。縹色不審紙。每冊首並に目首、

卷首に単辺方形陽刻「元／政」朱印記、首冊尾並に第五冊首に

同「岫山瑞光蘭若」朱印記、目首並に每冊首に同「黃龍窟」朱

印記、同「刀水文庫」（川口刀水所用）朱印記を存す。首冊前

見返し詩箋を貼布し「精選唐宋千家聯珠詩格 合本五冊／深

草之元政律師舊藏本（中略）／后千高松東濱町／灘波鹿泉翁／

藏スル處タリ（中略）／故アリ此書冊大正二年十一月十七日城

南淀川樓ニ於テ競賣／ニ附ス書林成文堂落札シテ之ヲ獲タリ夜

二入り予宅ニ携／来ル予悦テ之ヲ収藏ス／（中略）木石居主人

萬誌」等墨識、旧書帙裏面に同趣「木石居山人川口萬誌」等朱

識を存す。

同 闕名刪注

朝鮮刊（甲辰字） 翻甲寅字刊本

朝鮮朝にはもう一種、甲辰字を用いた本書の銅活字刊本がある。

甲辰字本は、前掲のいずれの版種とも異なり、詩篇を列す

のみで注を附さない、無注の本文を有する。但し、推定され

る于氏原編の『詩格』三卷とは異なり、蔡氏増編の二十卷から

批注を取り去った形である。現存本を見る限り、刊行の年次は

明らかでないが、甲辰字の鑄造された朝鮮成宗十五年（一四八

四）から、壬辰倭乱（文祿の役、一五九二）の間に限定され、

前出の弘治十五年（一五〇二）跋刊本と雁行し、本邦（江戸初）

刊本には先行するものと推される（図版九）。

先ず蔡正孫序（第一張）、首より本文（上略） 歲庚子春三／月

蒙齋野逸叟蔡（正孫）粹然書于方寸地。每半張十二行、行十

九字。

次で王淵濟序（第二張）、首より本文（上略） 大徳己亥花朝玉

淵王（淵濟）道了敬書／于龍湖書堂。款式同前、以下同じ。

次で于濟序（第三張）、首より本文「上略」徳／西孟商番易黙

齋于（濟）徳夫「序」〔一〕内刪去、背面より貼紙訂印。

次で総目（九張）、首題「精選唐宋千家聯珠詩格總目」／（低七）

〔番易黙齋于（濟） 徳夫／建安蒙齋蔡（正孫）粹然〕編集、

次行一格を低して卷数、次行より二、十格を低して編目を標す。

卷之二十「用後身字」に至る。尾題同首。

卷首題「精選唐宋千家聯珠詩格卷之一（至二十）／（低七）〔番

易黙齋于（濟） 徳夫／建安蒙齋蔡（正孫）粹然〕編集／

四句全對格（墨圈）／ 漫興（隔九）杜工部、次行より本文。

編目に標出の文字は墨圈陰刻。傍点、傍圈附印。每篇改行。

- 卷之一（六張） 四句全對格 一起聯物喩物對格
- 卷之二（七張） 後聯對句格 一後二句疊字相貫格
- 卷之三（八張） 第一句疊字格 第四句貫頭兩句格
- 卷之四（一〇張） 用只今字格 一用如何字又格
- 卷之五（一〇張） 用今日字格 一用近來字又格
- 卷之六（一〇張） 用須臾字格 一用逢人字格
- 卷之七（一〇張） 用自字格 一用無情字格
- 卷之八（一〇張） 用無消息字格 一用不作字格

卷之九（九張） 用引得字格 一用不信字格

卷之十（一二張） 用聞說字格 一用儻字格

卷之十一（一二張） 用從今字格 一用何処字又格

卷之十二（二三張） 用可是字格 一用不然字格

卷之十三（一〇張） 用只合字格 一用不見字格

卷之十四（一〇張） 用見字格 一用人不到字格

卷之十五（九張） 用直字格 一用看字格

卷之十六（一〇張） 用吟字格 一用誤字格

卷之十七（二三張） 用留得字格 一用不用字又格

卷之十八（九張） 用分付字格 一用辜負字格

卷之十九（一二張） 用兩自字格 一用枉字格

卷之二十（九張） 用至今字格 一用後身字格

四周双辺（二〇・六×一四・五糎）有界、每半張十一行、行十
九字。甲辰字。版心小黒口、双黒魚尾（向）問題「詩幾」、張
数。卷尾題「精選唐宋千家聯珠詩格卷之二」等、大尾題「精選
唐宋千家聯珠詩格卷之二十終」。

該本には屢々料紙を刪去し、背面より紙片を貼附して、同種
活字によって文字を押印、本文を訂補した箇所が見受けられる。
これらの修訂は、該本の伝存が乏しく諸本に一貫するとは限ら

ないが、朝鮮銅活字本の常例として、印出後頒布前に組織的に処置されたものと見なし得る。次にその箇所を列記すると、卷二第三張前半第七行（以下「二―三前七」等と表記）「殘」「雪擁籬」「根」（「」内訂）、四―五後十一「豈」「不好」「笑」、五―三後五「何」「應龍」、八―八後三首二句傍点刪去（同様の例夥し、下略）、十―四後八「夜」「夢」（墨開）「中」、十三―七後六「拳」「施」「桃」、十九―十後八「日」（貼紙）「門」等である。

該本について、詩篇のみの校合からも、朝鮮諸本に共通の異同を呈することが明らかである。例えば上に、本邦〔南北朝〕刊本と比較して、朝鮮明弘治十五年跋刊本、〔江戸初〕刊本（以下「江本」と仮称する）両者共有の文字によって同本を訂し得る所、また南本に対し弘江両本に共通して誤文を有する所は、該本にも同じ文字を有するから、やはり同じく甲寅字本系統の本文と見られる。一方、同系内で比較すると、弘本目一―六前三「用無限字」を、該本には「無恨」に誤り、三―三前七・王荊公「夜直」結句「月移花影上闌干」を「上欄干」に作り、四―二十七後九・（蔡）蒙齋「春暮」転句「千紅萬紫都狼藉」を「都狼藉」に作り、十一―三前六「長至」篇作者名「湖古潭」

を「湖古潭」に作り、十一―十前三・宋梅澗「春晚」起句「小麦収花太麥肥」を「大麥肥」に作り、十五―十一前八「酒醒」篇作者名「陸龜蒙」を「六龜蒙」に誤る等、該本特有の異文が認められる。「無恨」「六龜蒙」等は単純な、字形字音の相似相同による誤字と思われるが、その他、南本と共通、または諸本と対立する正文は、古形を存するか、或いは独自の改正によって古形に合致したか、両様の推定が成り立つ。また該本の用字を、字体のレヴェルで見渡すと、やはり弘本について例証した、甲寅字本系統の用法と確認される。ただ同系内で比較すると、完全には徹底しないものの、「来」「曾」「隨」「昏」「峽」の略字俗字を、「來」「曾」「隨」「昏」「峽」と正字に、弘江両本に訂されていた「冰」「恥」の正字を、「氷」「耻」と俗字に作る等、該本に特有の傾向も見出される。これは、甲辰字運用の規範が働いたと考えられる一方で、俗字の残存は、古形を訂さなかったものとも解し得る。以上を踏まえ、同系中の諸版との関係を考えると、弘本江本相互に特異の本文を、該本と共有する例は認められないから、弘本や江本のどちらか一方に基づく可能性は乏しく、江本は恐らく該本より後出であって、その可能性は一層淡い。従って、該本の底本も元の甲寅字本ということにな

り、甲寅字残本に徴する限り、そう考えて矛盾がない。該本は無注であるから、甲寅字本二種のうち、単注本から蔡氏批注を除いたのか、増注本から蔡氏批注と徐氏増注とを刪去したのか、俄かに判じ難いが、覆刻増注甲寅字本二種と対立する文字を含むからには、単注本の形に基づくことも考え得るであろう。ただ現在、甲寅字本二種の本文を十全に比較することは叶わないから、そう断定することは差控えたい。

甲辰字本については、以下の二本を録することができた。

〈国会図書館 WA三六・一〇〉

二冊

釈閑室元借手沢 円光寺旧藏

後補淡波引表紙(三一・〇×一九・八種) 右肩打付に「結」と書す。左肩打付に別筆にて「唐宋千家聯珠詩格 乾(坤)」と書す。その右傍、又別筆にて「従家康公拜領」「閑室元借」と朱書す。改糸。本文白紙。虫損修補。每冊前副葉、その前半左肩さらに別筆にて「聯珠詩格 上」と書す。原序、総目を存し本文。

上冊のみ(江戸前期) 朱筆にて豎傍句点、同朱墨返点、連合符、音訓送仮名、行間片仮名交り補注書入。巻一のみ別墨返点、音

訓送仮名、行間欄外補注(稠密) 書入、縹色不審紙を存す。每冊首に単辺方形陽刻「瑞巖圓光／禪寺藏書(書)」朱印記、每冊尾に家形(層上)敬(刻除)・(層下)復／齋(刻有界)・(層下)墨印記。上冊尾に「洛東圓光禪寺常什(右邊墨印／即閑室和尚也)」墨識あり。²⁸⁾

〈延世大学校中央図書館 貴七九六／八一二・一三〉 一冊

存卷十二至二十首尾欠

後補丁子染艶出表紙(二五・四×一八・四種) 左肩打付に「聯珠詩「格」と大書す。右肩より別筆にて「甲子夏六改装／聯珠詩「格」合部」と書す。四針眼。前見返し詩草、又別筆にて「甲子夏之六月之八改衣装」と書す。首一張、卷十三第九張以下、卷十八第九張以下、卷十九第十一張、卷二十第八張以下欠。卷十三首匡郭二〇・八×一四・五種。墨破損部鈔補、欄上標圈、標点書入。卷十二第三張前半、卷二十張第六張後半に単辺方形陽刻不明墨印記を存す。

上記を総合すると、本書の元版から派生した本邦(南北朝)刊本と、朝鮮朝の甲寅字刊本を根元とする覆刻本類とは、それ

それ別個の系統を成し、建安蔡氏編刊の大徳四年頃初刻本の原貌を窺う上からは、両者を勘案する必要がある。〔南北朝〕刊本の系統は、版本としては孤立しているが、日本の旧鈔本中には、並行関係に当たる元刊本伝写本が見出され、ある程度、翻刻の誤りを是正し得る。一方、朝鮮本の系統は、款式用字等の検討から、両種の甲寅字本を画期とすることは容易に判明するが、甲寅字単注本とその覆刻本、甲寅字増注本の三者は、残本のみ伝来で、全編を対校することができない。よって全存する甲寅字増注本の覆刻本二種を以て底本の姿を再構し、先行諸本をその前段階に位置付けることが次善の策と見なされる。そして実際に、朝鮮明弘治十五年跋刊本、日本〔江戸初〕刊本の覆版二種を校合し、甲寅字残本とも比較してみると、後者の方が底本に近いが、やはり相応の誤刻と、意改の疑われる箇所が認められ、相互に照合することが欠かせない関係と判明した。加えて甲辰字刊本も、詩篇のみながら同根の本文であり、校勘に益する点がある。そうした理解に立って、〔南北朝〕刊本と、甲寅字本系覆刻本の対校を試みれば、前者は款式や字体字様にも古形を止め、活字翻印による整理を経ない本文を有するが、惜しいことに翻刻の粗雑な箇所が多く、本文の理解を妨げるこ

とも少なくない。その点で甲寅字本系統の本文は、徐居正の注解校正を経て、読み易く整定されていることの利点大きい。但し翻印整理の行き過ぎる所も、蔡氏批注等にはやや多く見出されるから、特に注意が必要となる。つまり、原形を知るためには〔南北朝〕刊本を基礎として、甲寅字本系統の本文を合わせ見る方法に、本文を読解する上からは、覆甲寅字本、どちらかと言えば〔江戸初〕刊本を基礎として、古本を勘案する方法に便宜がある。またもとより、本書受容の詳細な情況を知るためには、個々の版種、一々の伝本を検討する作業が欠かせない。上記を図示すれば、以下のようになる。〔不全本には×号を冠した。↓は覆刻、∴は依拠関係を示す〕。

〔南北朝〕刊本

（×文安元年伝写元刊本）

×朝鮮甲寅字刊単注本 ↓×朝鮮刊本

×朝鮮甲寅字刊増注本 ↓朝鮮明弘治十五年跋刊本

↓〔江戸初〕刊本

∴ 朝鮮甲辰字刊本

最後に、近世の日本に於ける本書流布本の成立について触れたい。室町期まで、本書の元刊本もしくは〔南北朝〕刊本系統による単注本の受容に止まっていた日本では、文禄慶長の役（一五九二、七）を画期として、朝鮮刊本、殊に徐居正増注本の受容が広がった。現在まで朝鮮明弘治十五年跋刊本、朝鮮甲辰字刊本の伝来が認められた他、寛永九年以前（江戸初）刊本が、両者と同じく朝鮮甲寅字刊本を底本として、徐氏校注の優良な本文を流布させた。しかし日本での本書の普及につき、さらに一層の広がりを実現したのは、覆甲寅字版の款式を改め、附訓を施した新版である²⁹。恐らくは寛永年間に出版されたこの増注附訓本の他、江戸前期には延宝三年（一六七五）刊行の中箱本等、刪注附訓の上、平仄と韻目を附し、より強く実作への応用を意識した版本も出される。大略、朝鮮朝由来の該博詳細な徐注を抛り所として受容が為された、と言えるけれども、但し江戸前期頃までの鈔本を見れば、室町以前から続く、蔡氏批注のみに依拠した受容も命脈を絶つておらず、詩篇と批評との繋連や、批注自体が古形を保っていた一面のあることも注意されてよい。江戸中期、盛唐詩受容の流行期を夾んで、文化元年（一八〇四）に江戸で刊行された大窪詩仏校訂本は、そうした

単注本を中心に増注諸本を校合した形であり、さらにこれを踏まえ天保二年（一八三一）に京で出版された真名海屋校訂本は、反対に朝鮮伝来本を核として増注本の普及を図っており、江戸後期から明治にかけては、この対照的な二種を軸として、さらに一段の流行が起こったのである。

これを要するに、本稿に取り上げた旧刊諸本を元に、近世の流布本が形成され、受容を喚起していったわけであるが、冒頭にも記したように、その詳細を述べる準備が今はない。まず何よりも諸本の欠を補う足本の搜索と、本稿で触れ得なかった旧鈔本の詳細な研究、江戸時代諸版の龐大な諸伝本をなるべく多く閲した後に、本書と日本漢学の関係を明らかにしたい。

〔注〕

- (1) 後出（二四七頁）本の識語に基づいて、私に句読を加えた。なお蘇峰の『読書九十年』には、本書への言及は見られない。
- (2) 神戸市立中央図書館吉川文庫に蔵する本書の文化元年刊本（五冊、集Ⅲ・六・一〇）を見ると、氏の本書閲読の痕跡を窺うことができる。
- (3) 以下本稿の全編に涉って下氏著書を参照した。特に本文の考証

については、逐一記すことはできなかったが、同書に拠る所が少なくない。

- (4) 曾子良の伝は『隱居通義』卷十五、『弘治』撫州府志』卷二十二等による。

- (5) 蔡氏著作のうち『詩林広記』は、元明版を遺存して「欽定四庫全書」にも収めるが、『東坡和陶詩話』は、『聯珠詩格』序の首に「陶蘇詩話」と録するのみで佚書と見られていたものを、近時、金程字氏が「高麗大学所蔵『精刊補注東坡和陶詩話』及其価値」(『文学遺産』二〇〇八年第五期)中に、韓国高麗大蔵本を紹介、その内容を報告された。

- (6) 本書の王淵洛序に「淵濟於蒙翁生後二十年」とある。魏天応との交渉については、下氏『校証』解題中に、本書と『詩人玉屑』の交渉に即して詳説されている。また本書中に知られる蔡正孫交流の者は、他に「薛深道」(卷三「梅邊酌月」)、「陳氏」(卷七「訪友人不遇」)、「陸君是」(卷九「贈陸君是」)、「李穉芳」(卷十一「訪僧滄者而去」)、「唐君疇」(「林筆峯」)、「趙君秀」(卷十二「星夕會友」)、「王秋江」(卷十五「寄訊王秋江」)、「吳兩岩」(「其弟省齋」) (卷十九「同山無燕」)。この中の王秋江についても、下氏『校証』附録二「唐宋千家聯珠詩格」所選宋代詩人叢考」中に言

及がある。

- (7) 序中の本文八種を現存本に引当てると、元刻本は所在不明。綠陰茶寮(山本緑陰蔵)朝鮮本は、本稿に挙げたいずれの種類か不明。平安翻刻元版本は(南北朝)刊本(五山版)。朝鮮版翻刻本は(江戸初)刊本(覆甲寅字版)、活字本は、朝鮮朝の甲寅字本(二種)か甲辰字本か不明。正徳本は、文化元年版の本文欄上の校語を見ると、恐らくは正保本の誤りで、これは寛永頃(江戸初)刊行附訓の正保三年吉野屋権兵衛修本。巾箱本と別版巾箱本は、延宝三年刊本もしくは刊年不明の(江戸中期)刊本等であろう。

- (8) 同篇は『韓内翰別集』及び『全唐詩』卷六百八十一に「白沙縣抵龍(一作尤)溪縣、值泉州軍過後、村落皆空。因有一絶(此後庚午年)、三體詩」に「尤溪道中」の題目を冠する。

- (9) 「狼藉」と「狼籍」の如く、元來別字であつても、本文内での運用上、同種異体字として使われているらしい字もあるが、一般に慣用されていないものは別字と見なした。

- (10) 『山谷詩集』卷十三、『山谷詩集注』卷十三等の本集に「姪相隨知命舟行」篇を収め、題下自注に「相字惟深、小字韓十。知命第二子」とある。

- (11) 『岩崎文庫貴重書解題』著録。

(12) 島田家蔵書が蘇峰の手に渡った経緯について、蘇峰自身の『読書九十年』(一九五二、講談社)、また川瀬一馬氏『日本における書籍蒐蔵の歴史』(一九九九、ベリかん社)に詳しい。

(13) 『攷事撮要』冊板目録を見ると、全羅道羅州と慶尚道慶州の項にそれぞれ「聯珠詩格」とあるが、慶州の著録は後掲の版本に該当しているため、積極的徴証は見られないものの、本版は羅州刊本に当たる可能性がある。

(14) 該本の卷十七の末尾に「同接 遠客終日晚／同録(隔四) 同接録／(低三) 同録 朴景仁／同録 姜彦渡 李孝仲／(低六) 潘左寶／春風桃李花開(李彦明／應聖)／(低六) 姜巖」と、朝鮮朝の文事を伝える墨付がある。

(15) 『国立中央図書館善本解題Ⅰ』著録。

(16) 例証の煩雑さ、文本との比較の便宜を考え、挙例は卷四までに止める。南本とは全編校合を加えたが、傾向に於いて卷四までに異なる点は認められなかった。

(17) 直前の作者は「東坡」に作るが、該篇は『劉後村先生大全集』卷十に見える。同集結句は「不似葵花識太陽」に作る。

(18) 『秋崖先生小稿』卷二「雪後梅邊」詩之七に「爲予寫作百梅圖」に作る。

(19) 字体の正俗とは、一応後世の『康熙字典』を基準として述べる。もとより便宜上の措置に過ぎないが、幾ばくかの特色は示せるものと考えたい。

(20) 該本旧蔵者の著録は、延世大学中央図書館金永元氏の教示に拠る。

(21) 朴現圭氏編『台湾公蔵韓国古書籍聯合書目』(一九九一、文史哲出版社)、藤本幸夫氏『日本現存朝鮮本研究』集部(二〇〇六、京都大学学術出版会)著録。

(22) 『米澤善本の研究』(一九五八、市立米沢図書館)に、朝鮮刊本と著録する。

(23) 校注引文を見ると、文化元年刊行の大窪詩仏校本の標注に合致する。

(24) 当室カード、当学OPAC上に朝鮮刊本と録する。

(25) 『北京大学古籍善本書目』に朝鮮刻本と録する。注(3) 卞氏著書解題中に紹介の朝鮮刻本も或いは同本であろうか。

(26) 『国立中央図書館善本解題Ⅰ』著録。

(27) 注(21) 藤本氏著書に、該本について「中宗明宗間(一一五〇六～六七)と推定されている。なおその刊地も「漢陽校書館」とされ、併せ従うべきであろう。

(28) 沈暁俊氏『日本訪書志』著録。また注(21)藤本氏著書参照。

(29) この版本は、後の正保三年(一六四六)に京の書肆吉野屋権兵衛が修刻し、再印した本が流布していることから、屢々正保三年刊本と誤認されている。しかし日光山輪王寺天海藏、斯道文庫等に蔵する無刊記未修本の存在から、寛永二十年(一六四三)の天海示寂以前の刊行、正保三年修印と見られる。

(30) 同本の貫名海屋の序に「頼有江戸近刻本、而惜乎刮去増注」とする点は、必ずしも従前の経緯を反映していない。

〔附記〕

本稿は平成二十年度文部科学省科学研究費補助金に基づく特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成―寧波を焦点とする学際的創生―」詩文受容班・計画研究「五山文学における宋代詩文の受容と展開―詩文集の注釈と詩話を中心に―」による成果の一部である。

文安元年字 佖字元刊本·江應元序末並卷首 慶應義塾圖書館藏

謂妙矣其教又可謂忠矣夫絕句作法可謂大備而無遺矣得之况驪毫領下者累相貫名曰聯珠詩捨不亦宜乎學詩者得此便可按圖索驥依之樣葫芦復熟之

後走盤圓法機轉無窮豈惟絕句令檢推之於長編唐律觸類而長皆自此中充廣之耳所謂雜者奚夫雜板而行之以廣其傳賞音者心衆矣皇慶癸丑小春朔建江應元體仁叟書于秋密吟隱

精選唐床千家聯珠詩拾卷之一

番禺默齋于 齋 德夫 編集

建安蒙齋葵 孫 粹然

四句全對枕

愛興 之類字者下字如...此則此字下對...之類 杜工部

糝徑楊花鋪白氈 糝之類字者下字如...此則此字下對...之類 吳溪荷葉疊青錢

竹根稚子無入見 沙上鳧雛傍母眠

絕句

兩箇黃鸝寫翠柳 一行白鷺上青天

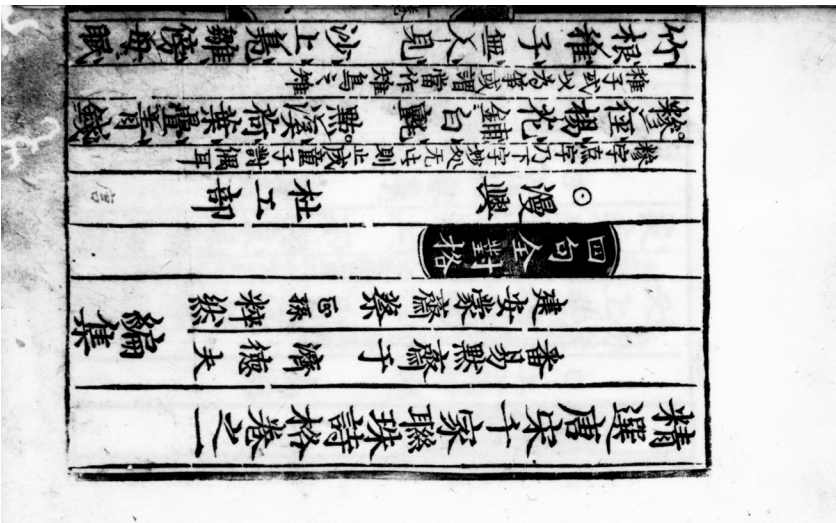
图版二

〔南北朝〕刊本·蔡正孫序首 國立公文書館藏



图版三

同·卷首同



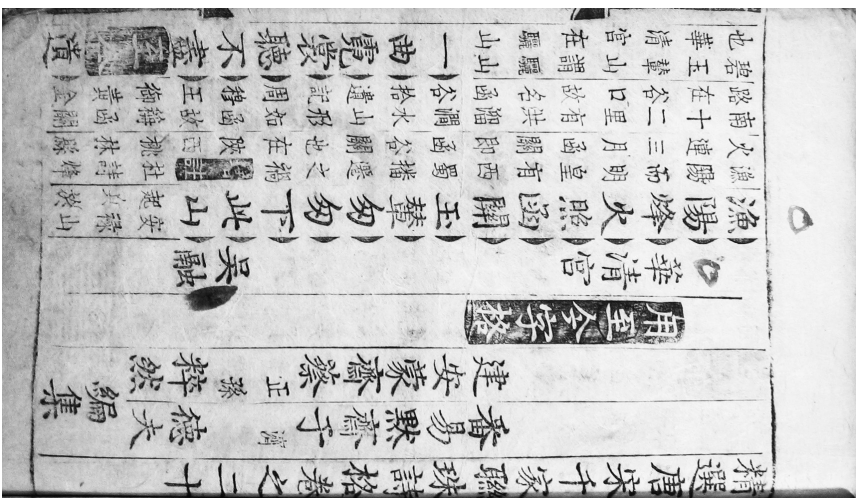
图版四

朝鮮刊 覆甲寅字刊单注本·卷十二首 延世大学校中央図書館藏



图版五

朝鮮甲寅字刊 增注本·卷二十首 高麗大学校中央図書館華山文庫藏



高麗大學校中央圖書館晚松文庫藏
朝鮮明弘治十五年跋刊 覆甲寅字刊增注本·卷首



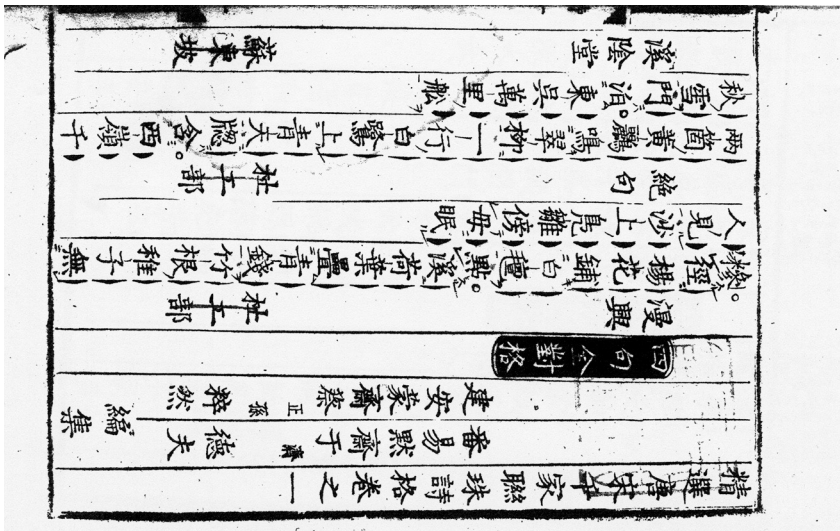
同·安探跋尾 延世大學校中央圖書館藏



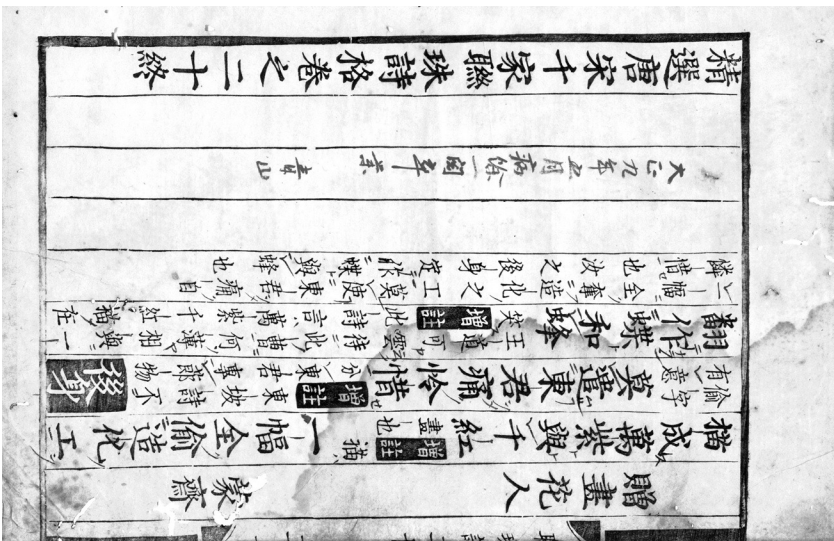
〔江戸初〕刊 覆朝鮮甲寅字刊增注本・卷首 慶應義塾大学斯道文庫藏



朝鮮甲寅字刊 刪注本・卷首 国会図書館藏



〔江戶初〕刊 覆朝鮮甲寅字刊增注本・卷尾 慶應義塾大學斯道文庫藏



同 寬永九年印本・同 大倉集古館藏

